
鉄風の騎士

SOLDIER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鉄風の騎士

【コード】

N0982K

【作者名】

SOLDIER

【あらすじ】

前世で殺された俺は異世界に生を受けた。

けれども俺は前を向いて歩いて行く。

歩く人生が茨ミチになろうと…

鮮血に染まる修羅になろうと…

光の無き地獄だろうと…

諦めたくなるほどの巨大な壁だろうとも…

ただ未来マエにある希望ヒカリだけを信じて…

時に悩み苦しみ嘆くかもしれない

けれどもバカみたいに前を向いて進んでやろう

そう

これは俺の決意の軌跡。

『財政計画と巡り合わせ……』の中編と後編を再びではありませんがやりメイクをすることにいたしました。そのため中編と後編を削除させていただきました。

読んで頂いている読者の方々にはご迷惑をおかけいたしますが可能な限り早く投稿したいと思しますので何卒ご容赦のほどをお願いいたします。

プロローグ（前書き）

このSSはゼロの使い魔のオリキャラ転生となっています。

オリキャラの作ったオリジナルの魔法等も登場してきます。

ブローグ

あー背中が嫌つつー程熱い……

体中から血が抜けてくのがわかるわ…

というより……銃弾に体貫かれた時の感覚って“痛い”じゃなくて
“熱い”んだな……25年生きてて知らなかったよ……

俺、シラサメタツヤ白雨龍鶴は今…小雨の降る夜道に倒れ、腹から血をアスファルトで舗装された地面に垂れ流している…

そんなことより……今日……俺は何したっけ？

フツーに会社行って仕事して……

同僚のOLに残業する前に階段に呼び出されて告白されて……

「タイプじゃねえし好きでもねえから」ってバツサリと断って……

帰り支度して会社からアパートに帰る途中に……

四人組の連中に殴りかかれて3人返り討ちにしたら今……

リーダーっばいヤローに拳銃で撃たれたんだよな………バアンバアン
ンバアンと何発も乱射されて一発が腹に貫通して……

まさか…告白断つたのが原因なのか？

なんだよその下らねー犯行動機は!!

よほど下手な刑事とかサスペンスドラマや小説でもほとんど見掛け

ない動機だったの！！

確かに……告って来たあいつは“世間一般的”に言えば美人の分類に入るんだろーけど……

確かに今思えば……俺の断り方も悪かったんだろーけど……

アイツは昔……大学時代の……社会人時代の俺の後輩に手エ出してほつたらかしたのが気に食わねえ……っーか許せねえ！！

しかも俺がボコったの……あいつのいる部の男連中だよな……？

通りでどっかで見ただ顔だと思っただよな……

たまに書類届けに行くしな…営業部に……

俺経理部だから……営業の金関係で……

バカ騒ぎした学生時代の同級生達や社会人時代の同僚に幼なじみ達

……

“超”が付くほど仕事が出来て何かと俺に厳しかった親父……

ヤの字の付く自由業さんにも勝てると言われる親父をボロ雑巾のよ
うに完膚なき迄に叩きのめしてかかあ天下にしながらも俺を育てて
くれた母親……

あーいろんな思い出が甦ってくる…これがあの死に際に見るといわれていると噂の「走馬灯」ってやつなのか？

畜生……………目の前が霞んできやがった……………前がよく見えねえよ……………

俺……………死ぬんだな

なんか……………まるで実感が湧かねえな……………

“まだ生きれる”……………心のどこかにそんな希望があるからだろう
か……………？

『畜生…まだ……………』

まだ死にたくねえよ…』

柄にもないけれど…………もう50を過ぎてても現役の親父達への親孝行
とか…………

会社の仕事とか…………プロジェクトとか

色々とやり残したことがそれこそ山のようにあるってのによ……………

畜生……畜生……畜生……

俺が心の中で悔やみながらそう呟いたら……

俺の目の前が真っ暗になった……

異世界での生誕

あれ……？おかしくね？

俺は死んだはずなのに……

なんか周りが眩しーし喧しいんだけど……

ここが“天国”いや……“あの世”ならあり得るかな……

けど……“三途の川”渡った記憶無いんだけど……

そう俺は思いかなり重たくなっていた瞼を持ち上げて目を開けた。

『お……おぎゃ？（ん？知らない天井だ……）』

これは定石セオリーのセリフでしょ……

つて………あれ？うまく喋れない……？そして何故赤ちゃん言葉……？

「……！はぐいディエルちゃん！パパですよ……！おいハンナ！ディエルが目を覚ましたぞ……！」

「本当！？はいディエルちゃんママですよ！」

……は？

コイツら……誰？

首がうまく動かないが体を見ると……

死んだ時の俺の年齢……25歳にしてはあまりにも小さすぎる俺の
体……

『お……おぎゃああああ（訳：は……はあああああ！？ぱ……パパ、
ママー！？）』

気がついたら俺は赤ん坊になっていました……

新しい生活

あービクツた……死んだと思ったらどっかの外人さんの赤ん坊って…どっかのファンタジーかよ!?

けどこれは紛れもない真実……

実際……俺は赤ん坊として転生したらしい…

俺の新しい名前はディエル・メディナクー・ド・フリーン……

新しい俺の親父はリンク・シュヴァリエ・ド・フリーリン

新しい俺の母親の名前はハンナ・シュヴァリエ・ド・マハード

“Fate” 蒼い騎士の真名と古代エジプトの神官様の名前が混じっているのは気のせいだ……

閑話休題

俺は“シュヴァリエ”の爵位を持つ貴族、“ド・フリーン家”の長男らしい。

因みに親父と母さんは2人とも“シュヴァリエ”の爵位持ちだ。

“ シュヴァリエ ” は家柄や金とかとは完全に無関係の実力でのみ手に入る爵位らしい……………

つまり俺の新しい両親はかなりの腕っぷしの持ち主…あー怖い…なるべく逆らわないようにしよう…

両親の話しによるとここはハルケギニア大陸の小国トリスティン王国…この家は新興貴族フリーン家の家屋らしい…

母さんは元貴族だったのメイジらしい…メイジってのはこの世界の魔法使いを指す言葉らしくトリスティンは大抵のメイジは貴族なんだとか

因みに息子の俺が言うのもなんだが………かなりの美人だ…某あ
かいあくまを淑やかにして髪を金色にしたって感じかな？因みに髪
型はツインテールではなくてポニーテールだ……

親父は平民上がりの軍人さん。武道全般をそつなくこなす軍人でか
なりの怪力持ち主…この間鉄の壁に足形と手形残してたし……？？

因みに顔はギルガメツシュそっくり…子供をあやす姿はかなり笑え
た……いやあれで笑わない方がおかしい。俺が堪えきれずに笑って
喜んでいたのはちょっぴり嬉しかったな………顔がヘラクレスでも
笑ってたな………

あと………最近わかったことだが何気に頭は回るらしい……

俺がトリステイン王国の小貴族“ド・フリーン家”に生を授かって
から約一年が過ぎた……

親父は家族第一だけど持ち前の鬼軍曹ぶりは変わらない…

仕事中とのギャップがスゲエ……………

母さんはある程度の軍務は控えて育児に専念している。今は赤ん坊
(|| 俺) 用の料理に興味津々らしい…

俺はというと…既に乳離れをして離乳食には入っている…

暇は腐るほどあるけれども……………今の出来ることは寝るか考え事しか
することしかない…

最近は俺の目と髪についてだ…

なぜなら両親は共に金髪で親父の瞳はサファイア、母さんはルビーの目なのに俺は黒髪に黒目なのだ…遺伝子のおかしい…いやおかしすぎる。

その上顔は蒼い羽織の“暗殺者さん”^{アサシン} そっくり……………おもいつきり日本人なんですけど……………？

親父と母さんが毎日…………庭でやる夜の鍛練を夜中こっそりと部屋の窓から見ている…

腕が鈍らないようにとかが理由らしい

武道…………主に護身術系統（空手や柔道）を前世で母さんから習って（半強制的に）やっていた俺だが…………

親父の動きは凄いと思う…無駄の無く熟練された動き、疾風の如きスピード…どれをとっても一級品だと思う

対する母さんも負けてはいない…気づかれないような独特な口の動

き…親父に負けないぐらいのスピード…手慣れたナイフ捌き……
強力だけど正確に放たれる魔法…

まるで龍と虎が戦ってるみたいだった…

これが夫婦喧嘩と見てもおかしくはないのだが………どうやら屋敷
の中ではもう見慣れた光景らしい……と執事やメイドの方々が言っ
ていた。

母さんの口の動きは戦闘でメイジがよくやる詠唱の仕方らしい……因
みに母さんは“炎華”の二つ名を持つ火のトライアングルメイジだ
とか…

ハルケギニアのメイジのレベルは足せる系統の数で決まるらしい…

1系統のドット

1系統の2乗か2つの系統のライン

3系統のトライアングル

4系統全てのスクウェア

以上のランクに別れるらしい

4系統は火、水、風、土がありさらに遙か昔に失われた系統の虚無がある。つまり……ペンタゴンはいないのだ…

俺達フリーン家は小さな領地を持っている…そしてその近くにトリステイン王国内の最大クラスの名門貴族“ラ・ヴァリエール公爵家

”が存在する…

“ド・フリーン家”はヴァリエール公爵家の部下的な存在だった親父と母さんが軍功を上げて得た領地だ……

トリストインでは魔法を使えない平民がメイジに中世ヨーロッパの農奴の如くこき使われている……

トリストインは所謂メイジ至上主義的なものがあり平民を人権などお構い無しに虐げているのだ……

前世で世界史を学んだ俺からすれば1789年にフランスで勃発した“フランス革命”やイギリスの“名誉革命”を代表とした市民革命がハルケギニアで起きてもなにもおかしくないのだが……

“実際は”それが無いのが不思議でならない…だがその最大の理由は魔法であった。

ハルケギニアでは平民は剣や弓を使いメイジは魔法を使うのだが魔法が圧倒的なアドバンテージをメイジにもたらすようだ……

さらに魔法は人々の生活の根元にまで関わっているらしく……ハルケギニアでは魔法を使わない技術…乃ち“科学”があまり発展していない……

そのため“仮にも”革命が成功したとしてもその後の生活に何かしらの異常が生じるのは必然的なのである……

つまり反逆が無意味になってしまつらしい……

だからといってメイジが威張りまくるのはいかなものか……

そしてさらに年月が流れ俺は9歳になった……………

親父達と何ら変わらない平穏な生活を送っていた……………

いや…変わった点は少しある…俺が両親から武道と魔法、さらに読み書きを少しずつ習っている。読み書きはすぐに習得できたが魔法が厄介だ…

俺は系統がどれかわからないらしい……………

今晚も親父と鍛練をし、家に戻った頃両親からリビングに呼び出された。

『何でしょうか？父上、母上……………』

「言い忘れてたんだがディエル…明日ヴァリエール公爵邸のパーティーに出席しなくてはならぬのだ…明日は早めに起きて欲しい…」

「だからといって魔法の本を持ってかないなんてことはないわよ…カリーヌ様に聞いておきたいことがあるの…」

国内外にも名門と名高い“ラ・ヴァリエール公爵家”のパーティーにウチが呼ばれるとは……………

『わ…わかりました。』

俺はその後寝室に行き眠りについた。

翌日ヴァリエール公爵邸でのパーティー出席の為に家族全員で馬車に乗り屋敷を出発した。

俺達が家を出発してから3時間後にヴァリエール公爵家に到着した。

その後パーティーが始まり両親はヴァリエール公爵夫妻と談笑をしている。

俺は子供サイズのスーツを模した紳士服を着用している。

ヴァリエール公爵の隣に立つピンクの髪を持つ女性はカリーヌ・デシレ。ヴァリエール公爵夫人だ。かなり気が強い女性でもある。

「閣下…こちらは私の倅のディエルにございます……………」

親父が頃合いを見て公爵に俺を紹介した……………」

『閣下、奥様、ディエル・メディナクー・ド・フリーンにごぞいます。以後お見知りおきを』

「うーむ…リンクに似ずかなり大人びているな…」

「全くね…“蛙の子は蛙”じゃないみたい……」

俺が父上に呼ばれ自己紹介をすると公爵夫妻が驚いたようにそう言った。

若干失礼なことを言われた気がするのはいかのせいかな？

『母上に色々のご指導をして頂きましたので……』

「はあ…リンクよ……お前は今でもハンナには頭が上がりゃうだな……」

「相当尻に敷かれているのね…リンク…」

「いえいえ……そんなことはありませんよむしろ亭主閑白です……
そうよね？あ・な・た」

「……………はい」
俺が頭を下げたままそう言つと公爵夫妻は溜め息混じりにそう言つた。

母さんは目線だけで親父を脅迫していた…親父がどんどん小さくなつていく……………

まさに“あかいあくま”だ……………親父に少しだけ同情した。

乾いた笑いを公爵夫妻がしていたのは俺の気のせいではないだろう
……

パーティーが終わりフリーン家とヴァリエール公爵家の一同だけが
ホールに残った。

「旦那様…奥様…実は今日一つご相談したいことがあります…」

親父は公爵の呼び方を“閣下”から“旦那様”に変えた…昔から
の習慣なのだろう……

「なんだ？お前が相談とは……」

「実はディエルのごことでして…ディエル…“あれ”を」

『わかりました…父上…』

親父が公爵の家族に畏まって聞くと公爵が不思議そうに返し親父が俺を前に出させた。

俺は親父から小さな石ころを受け取り…土の系統魔法の基本である《錬金》をかけた……

一瞬の静寂が流れ、石ころが8等分されたケーキのようにパカッと割れた…

まただ………

実は俺は系統と無関係のコモンスペルは扱えるが…系統魔法が全く持って使えないのだ…特に酷いのがこの《錬金》…どうやっても石

ころが割れたり砕けたりしてしまうのだ…

その光景を見て公爵夫妻そして公爵家の愛娘3人が首を傾げた。

公爵の左で公爵譲りの金のブロンドを持ち首を傾げているのは長女のエレオノール・アルベンティーン・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール

カリーヌ様譲りなのかかなり気が強い女性だ。

確か歳は20くらいだ…

エレオノールの左隣に座っているカリーヌ様譲りのピンクのブロンドと鶯色の瞳を持つのは次女のカトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール

箱入り娘のためか……かなりお淑やかな性格な女性で生まれつき体が弱いらしい

そしてカトレアの左隣に座って石をじっと見つめているカトレア様

と同じのピンクのブロンドと鶯色の瞳を持つ少女は三女のルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールだ。確か歳は俺の一つ下の8歳だ。

実際ものすごくルイズとカトレア様は似ているのだ…

カトレアさんは一言で言うなればルイズの発展形だ。

一応彼女達とは自己紹介も済ましている。

何故か黒髪黒目を珍しいものを見るような目で見られたが

「うゝむ…珍しいな…失敗ではないようだ…」

「と…どういふことですか!？」

公爵の発言に親父が身を乗り出して尋ねた。

「落ち着け…リンク…簡単に言うと《錬金》は成功しているのだが…純粋な《錬金》ではないのだ…ハンナも少しはわかるだろう？」

「はい…」

『閣下…それは一体どういうことでしょうか？』

全く持つて意味がわからん…

「ディエルよ…お主の《錬金》自体は成功しているのだが…内部だけが鉄に錬金されているのだが全体が錬金されない理由が別にあるのだ…」

『へ…別の理由ですか？』

「カーリーヌやエレオノールもわかるだろう？」

「「ええ／はい……」」

俺の脳内には？しか浮かばない。

「あなたの錬金は内部はしっかりしているのだけど土以外の系統が邪魔してるのよ……」

「外側が所々焼けたり濡れてるのは“火”と“水”、石が割れたのは“風”みたいね……つまりは4系統全てが一度に石ころに混ざり込んで喧嘩してるのよ……」

「そ……そんなことがあるのですか!？」

カリーヌ様とエレオノールさんの考察に母さんが首を傾げた。

「私もよくわからんがとにかくディエルには魔力のコントロールが必要なようだな…ハンナ…家に戻ったら魔力のコントロールを重点的に教えてやりなさい。」

「わかりました…ありがとうございます。旦那様、奥様、エレオノール様」

『ありがとうございます…!』

その後俺達は家に戻った。

覚醒と別れ

公爵家との会合から2年が過ぎた。

ヴァリエール公爵家のパーティーから帰宅した翌日から俺は両親から稽古をもらっている。

「ハッ！」

『くっ…』

親父の袈裟斬りに俺の木刀が叩き落とされた。

カラァン…ポカッ

「まだまだ太刀筋が甘いな……ディエル」

『ま………参りました』

今俺は屋敷の庭で親父と剣術の稽古をしていた。結果は無論俺のボロ負け……体の至るところに痛みが走る。

「でも中々上達してきたんじゃない？」

母さんがタオルを持ちながら俺達のところに歩いてきた。

「うーむ……こいつは槍術はすば抜けて上手いが剣術は中の中ぐらいだな……」

『剣術じゃ父上には敵いませんよ……』

槍術はリーチが長いから有利だろうと思って早めに努力したから意外に上達は早かったのだが……

剣術の打ち込みはかなり遅い…鍛錬が始まってから一年が経っているが親父には殆ど当たらない…

何故親父がこんなに武道に長けているかという親父は昔、ヴァリエール公爵の子飼いの軍人で王軍の内部では“金狼”の異名を持つメイジ殺しとして有名ならしい。

無論のこと異名の由来は鬣のような金髪と狼のように鋭い眼光だ……

因みに“メイジ殺し”とは平民でありながら貴族であるメイジと互角に渡り合える実力者のことを指す。

そして親父の剣術は俺が生まれる数年前に死んだ親父の親父…つまりは俺のじいちゃんとラ・ヴァリエール公爵から教わったとか…

どんだけ強いんだよ……ラ・ヴァリエール公爵……??

俺はそれを親父から聞いたとき一瞬身震いがしたのは内緒だ。

でもよりンク…ありゃ中々強い方だぜ？

屋敷の庭に俺達以外の男の声が響いたが俺、親父、母さん以外の人影は見当たらない。なぜならその声の主は剣だからだ…

親父の愛刀「ルシファー」…

某死神漫画の卍解状態の黒刀を彷彿とさせる漆黒の刀身と某海賊漫画の緑髪で腹巻き着用の超絶方向音痴三刀流剣士の業物そっくりの白塗りの鞘を持つ日本刀だ。

この世界じゃ日本刀はかなり珍しく「東方」ロバ・アル・カリイエにしかないとか…

つまりこちらの世界には日本刀がほとんど存在しないのだ…

一応前世の博物館やなんやらで日本刀を何度も見ている俺にとっては少しばかり悲しく思えた。

ルシファアは「インテリジェンスソード」という武器に分類される。

インテリジェンスソードとは魔法により知性を付与された不思議な
剣だ。

剣の他にもナイフとか色々種類があるとかないとか…

「まあな…悪くはないのだが…ハンナ…魔法の方はどうだ？」

「漸く安定して『錬金』ができるようになってきたわ…本当に
じやじや馬よねえ…」

『ぐ……………（真実すぎて反論できない……………）』

母さんの言葉に俺はぐうの音も出なかった。

俺は魔法の鍛錬は怠ってはいないつもりだが…

本当に魔力のコントロールが上手くないかないので公爵からヒント（？）をもらってから2年経った今でもまともに系統魔法が使えないのだ…

ただ…一応わかっているのは俺は“土”の系統魔法が得意であることがわかってきた…

何故なら“土”の系統が一番安定するからだ…

あの後から何回か公爵家に用事やなんやらで行ったが実に面白いことに気がついた。

三女のルイズ・フランソワーズは魔法が全く使えずに全て爆発してしまうようだ…

周りは笑ったり才能がないと蔑んだりしているが俺の考えは違っていた。

唱えるべきルーンの短いコモンスペルですら爆発を起こせるのだから戦闘ではかなり重宝すると感じたのだ…

その上庭にクレーターもどきを作る程の破壊力………

最悪………下手な爆弾や砲弾にも勝てるかもしれない………

こころで一つ考えてみよう…

普通は攻撃の魔法を使うには少しばかり詠唱が必要だがルイズは違う。

明かりを灯すコモンスペル《ライト》でも爆発するのだ。

つまりこの段階でかなりの時間的優位タイムアドバンテージが生じる。さらに言うとコモンスペルでの連射が可能という嬉しいのか悲しいのかわからないオマケがついているのだ…

つまりは魔力という名のマガジンが空になるまで機関銃を掃射されるようなものである……

弾幕を張るには最適だ……

まあ戦う相手にとってはうざったさがハンパないだろうが…

閑話休題

ここで俺がこの二年間で両親から教わったのを列挙してみよう。

まずはさっきの剣術と槍術や弓、暗器等の武器の扱い方。

母さん曰く「普通のメイジは杖無しの戦闘スタイルを知らないから覚えておくと楽になるわ」

そして親父曰く「杖無しでも戦えるようになれば戦闘の手段も広がるし魔法戦闘にも応用が効くらしい」とか……

確かに親父の言葉には一理あったが母さんの言葉の対象はあくまでも「普通」のメイジだ。

こちらの世界のイギリスを傾かせたような形の“浮遊大陸”アルビオンの竜騎士やトリステイン王軍のマンティコアやグリフォン隊の連中がどうであるか俺にはわからない。

無論竜騎士やマンティコア、グリフォンに乗る連中は皆メイジである。そいつらが杖無しの戦闘スタイルを考えていないとは思えないが…

暗器は何故か母さんから習っている。昔不測の事態に備えられるように覚えてみたらしい。
さらには魔法の鍛錬

魔力のコントロールが最優先課題であることがわかっている俺だが二年間をかけて漸く《錬金》が安定してきたのだけであるので当分

…俺の戦闘の基本スタイルは武器に頼るしかない…

ちよつとここでフリーン家の領地について説明しておこう。

フリーン家の領地はヴァリエール公爵家の領地から南に数百リーグ離れたところに位置し領地の形は東西に細長くなっている。

ヴァリエール公爵家の領地は国境に位置するためフリーン家の領地も同様に国境付近に位置している……

土地はトリスティン内部では肥沃とされ農林業と畜産業と商業が主要産業となっている。

本来ならば“シュヴァリエ”のような低級爵位に与えられる領地の状態ではない気がするのだが………気のせいだろう………

両親が爵位の中でも最下級の“シュヴァリエ”の爵位しかもたない貴族でありながら領地を持っているのはいくつか理由がある………

一つは王家からの褒章である。

親父と母さんは王軍でも結構な実力者であるために王軍内部から主張があつたから……

二つ目はテストみたいなものでもある。

親父は平民上がり、母さんも一時とはいえ平民である……そんな奴らが王家にどれだけ忠誠心があるか等のテストでもある。だがこの理由は半ば陰謀でもあるのだ……

親父と母さんが王軍内部の根っから貴族の高級将校や王室の文官の連中から毛嫌いされているためである……

奴らからすれば平民から成り上がった親父は天敵であり宿敵なのだ

……

つまりは言い方がおかしいが「昇格付きの左遷」か「昇格付きの厄介払い」ともみられてもおかしくはない……

例えるならば……優秀だが口煩い平社員を地方の支店長にして本社から移動させるようなものである……

親父達は軍人なので政治的なものは苦手なため…領地経営は貴族の文官に任せている……

俺もいつかは領地経営を試してみようと考えている……やってみたいことも多々あるしな……

「そつだディエル…明日から1週間家を離れなさい……」

突如……親父がなにか思い出したようにそつ言った。

『な…何故ですか？』

「あなたにはサバイバル訓練をしてもらおう…南の山中で1週間、食料調達や寝床の確保、自然の中で1週間生き残りなさい。」

言い忘れたがこの家から南に数リーグ離れたところには山があり猛獣が結構多いことで地元では何気に有名だ。

そんなところで1週間サバイバル…一見過酷だが成功すればレベルアップは間違いないだろう。

『わかりました。では明日から1週間、家を開けさせていただきま
す……………』

そして俺は翌日、早朝に家を出発し、山籠りを始めた。

その山を一言で示すなら“富士の樹海”だ。山というよりは樹海に近いそれは前世で流行したモハの樹海にそっくりだ。

俺の持ち物は小さい木製の杖ただ一つ。

それだけで1週間生き残らなきゃならないのだから魔法に頼るほかない。

でもモンスペル以外の魔法はほぼ使えない。

どうしよう……

山に入ってから4時間は経っただろうか…

ギュルルルルー

突如……俺の腹の虫がうめき声を上げた。けど食料は見つからないしナイフがない…

こういう時、ものすごくFateの《トレース・オン投影開始》がうらやましく思える。

一瞬でナイフとかを作れるのだから…

ん？……………待てよ？《投影開始》？

《錬金》をこの世界の《投影開始》的なものと考えてみればいいんじゃないかねえか？

元々《錬金》は《投影》と同じく何かを【創る】魔法だ……………“魔術”と“魔法”……………似て非なるものではあるが何か通じることがあるかもしれない……………

『ものは試しだ…《錬金》！』

浮かべるイメージはサバイバルナイフ…

……ん？

今までの《錬金》と感じが違う……？

なんて表現したらいいんだろうか？

磁石みたいと言うか（こっちの世界に磁石があるかは知らないけども）杖から放たれた俺の魔力が砂鉄を集めてるって感じかな？

俺がそう考えてる内にサバイバルナイフが《錬金》された。

『よっしやあああああああ！！』

俺は山の中にも関わらず雄叫びを上げた。

俺の人生史上初めて“ちゃんと”成功した系統魔法…どうせなら両親に見てもらいたかった。

親父達は失敗(?)ばかりの俺を励まし続けてくれたから…

グルルルルルル

……ん？後ろから唸り声が聞こえた。さっきの俺の雄叫びに気づいて近づいてきた多分狼かなんか……決して俺の体内の空腹の叫び

ではない……………んむ…んむ…

喰えるよな？

俺はサバイバルナイフを左手に握り後ろに振り向くとそこにいたのは…

一匹のマンティコアでした。

何故ですか？何故こんな辺鄙な樹海の中にトップクラスの幻獣マン

ティコアがいるんですか？しかも超強そうやつ……

俺がそんなことを考えている内にマンティコアは唸りながら突っ込んできた。

俺はそれを左に跳んで避けたが後ろにある大木が柔らかい生肉のように噛み砕かれた。

『チツ…どんな顎してんだよあの野郎』

俺は小声で詠唱し土の系統魔法、ドットスペル《アースハンド》を発動した。

ガシツと土の手がマンティコアの後ろ足を掴み動きを止めた。

俺がそれを機にマンティコアに斬りかかるうとした時…

「……………ウインデ」

大地を切り裂くような殺気が樹海の何処かから放たれ咄嗟に俺は後ろに跳んだ。

その時微かに詠唱の音が聞こえた。樹海の中で聴覚が鋭敏になったから聞こえたのだろう。

ヒュウンー！！

一瞬だけ目の前が歪むと大木が豆腐（ハルケギニアには豆腐はないけど…）ように真っ二つに切り裂かれた。

『チツ…風のメイジ…それもトライアングルかスクウェアクラスか……………』

ウィンデは風系統の魔法のスペルに付く語尾だ。しかも切れ味から
相当な使い手だろう。

チツ…真面目に厄介だ…

魔法を習ってから感じた一つの感想が………

風の系統優遇され過ぎじゃねえの？

である。

不可視で隠密に策敵、しかも派生に雷と氷があるとかどんなチート
系統だよ…

まあ火力が低いのはラッキーだけど…

多分人数は一人で声色から女…

此方はかなり不利だ。まだ日は高いから樹海でもナイフがキラキラ光っちゃうから場所がバレる。

だが………この条件は利用できる。

『《錬金》……』

俺はナイフをさらに4本錬金し手にある全てを木の幹目掛けて投擲した。

全てのナイフが樹に突き刺さり鏡の如く輝く

『《錬金》…』

母さんの真似をした詠唱で二本の短剣を錬金し、ナイフから見える敵に突っ込み斬りかかった。

だが斬られた敵は霧となり虚空へと去っていった。

——ユビキタス偏在

風系統のスクウェアスペルにして風が最強と声高に言われる所以の魔法だ。

それは術者と同じ技量の偏在を作りだし力量は術者の意志に比例するチート魔法だ。

つまり敵は偏在を囿にしたのだ……

完全にミスったな……完全に負けた……戦略的にも技術的にも……

「まだまだだね……ディエル」

俺の背後から女性の声が聞こえ……首にそつと杖が当てられた。

俺は背後から聞こえた声に聞き覚えがある。

『カ……カカ………カリー又様！？』

その人物はカリヌ・デシレ。

ラ・ヴァリエール公爵の妻だ。

「貴方……こんなところで何をしているのかしら？」

『はっ！！私は父上と母上からこの山にて今日から1週間の山籠りをしるとの命を受け山籠りしております。先程…貴女に杖を向けた無礼をお許し下さい……』

「構わないわ……まったくあの2人ったら…私は使い魔のマンティコアとの散歩よ…それじゃ頑張りなさい」

『ありがとうございます…！』

カリリーヌ様はマンティコアに跨がるとそのまま去って行った。

SIDEカリリーヌ

「まだまだだね…ディエル」私は散歩で来た山の中で杖を向けてきた少年の首に杖を突きつけた。

ディエル・メディナクー・ド・フリーリン

王軍屈指のメイジ殺し“金狼”と火のトライアングルメイジ“炎華のハンナ”の一人息子……

出会ったのは2年前のパーティー……やけに大人びた性格に珍しい黒髪黒目の子供だった。

使い魔のマンティコアが彼を襲った。

私はそれを止めることなく静観していた。

どれだけの実力があるのか興味があったからだ

彼は《錬金》と《アースハンド》を駆使してマンティコアを追い詰めた。

「……ウィンデ」

それを見て私はすぐさま詠唱を行い風のトライアングルスペル《ウインド・カッター》を放った。

決まったと一瞬思ったが彼は殺気を感じたのかそれを瞬時に回避した。

『チツ…風のメイジ…しかもトライアングルかスクウェアクラスか……』

彼はこう呟いた。そしてナイフを新たに4本瞬時に錬金し投降した。

最初はその行動の意図よりも彼の詠唱方法に目がいった。それはメイジが戦闘用に用いる独特の詠唱方法

いくら母親、“炎華のハンナ”が実力のあるメイジだとしてもそう簡単には習得できる詠唱方法じゃない…

それにハンナは教えているのは魔法の基礎だけだと昔言っていた。

そしてあの夫婦はたまに本気で闘う時がある。

つまりこれが何を意味するのか…

ディエル・メディナクー・ド・フリーンは両親“金狼”と“炎華”の戦闘を見てあれを覚えた。

私はそれに微かな悪寒を感じた。

私がそう考えている内に彼は短剣を錬金し突っ込んで来た。

場所が正確すぎる…

だがその疑問は直ぐに解消された

先程彼が投降したナイフが鏡の役割をし彼に私の位置を教えていた。

「ユビキタス・デル・ウィンデ…」

私は一体の偏在を作り出して木の影に隠れた。

彼は偏在を切り裂いたが私がすぐさま首に杖を突きつけたことで決着がついた。

『カ……カカ……カリー又様！？』

彼は相手が私だと気づいていなかったようだ。

「貴方こんなところで何をしているのかしら？」

『私は父上と母上からこの山にて1週間山籠りをしるとの命を受け山籠りしております。先程は貴女に杖を向けた無礼をお許し下さい……』

彼は律儀にも謝罪してきた。

「構わないわ…まったくあの2人…私は使い魔のマンティコアとの散歩よ…それじゃ頑張りなさい…」

『ありがとうございます…！』

私は彼にそう言い残して使い魔に乗り山を抜けた。

ナイフが彼にもたらす不利を利用したあの戦術眼

戦闘の最中のあの詠唱方法に突然の襲撃だというのにあの氷のように冷静沈着な対応…

「中々面白いじゃない…」私は屋敷の帰り途中にそう呟いた。

SIDE デイエル

カリヌ様とのブチ戦闘の後俺は狼をナイフと《アースハンド》で狩り起こした火で焼いて食べた。それが昼飯兼晩飯。

つまり2回に分けて食べたのだ。

そして俺は眠りに就き翌朝から本格的に縄文、弥生時代並の生活がスタートした。

2日目は弓と矢を《錬金》して兎と鹿を狩って食べた。その時に熊に遭遇した。無論両手が塞がったので《アースハンド》で動きを封じ込めて退散した。

3、4日も同様の狩り生活だったが5、6日目は違った

山の中に小さな川を見つけ魚を《鍊金》した銚や木の蔦を使って編んだ網で鮎っぽい淡水魚を捕まえて焼き魚にした……

7日目はキノコやなんやらの山菜類が多くとれたので《鍊金》で鍋を作り出して捕まえた魚や兎と煮込んだ……

こうして俺のサバイバルは終わった。

ぶっちゃけサバイバルっぽくねーむしろキャンプって感じ満々だった気がした……

杖を持ってくるべきではなかった……と俺は後悔した。

そして俺は山を下りて家に歩いて向かった。

数時間かかって漸く家にたどり着いた。

俺が家の前の門に立つと家の中からメイドの悲鳴が聞こえて来た。

俺は門の中に駆け込み玄関のドアを押し開け内部に向かった。

悲鳴が聞こえて来たのは屋敷の西側…親父達の部屋だ。

『リックさん！一体どうしたんですか！？』

「ディエル様…リンク様とハンナ様が…」

親父達の部屋の前に初老の男が立ち尽くしていた。

彼はリック…この家にて働いている執事だ。

『！……！』

『……父上……母上……？』

俺が部屋に入ると親父達が血塗れになって倒れていた。

部屋のガラスは全て粉々に切り裂かれていたが荒らされた形跡は皆無

俺は親父達の元に駆け寄った。

『父上！母上！しっかりして下さい！！』

「デイ…………エル…………か…………ゴハツ…………サバイバルはできたようだ
な…………」

「本…………当ね…………お疲れ様…………」

親父達は口の端から血を流しながら俺にそう話しかけて来た。

『喋らないで下さい……傷に触ります！漸く魔法が……《鍊金》が出来たのです！！』

「それなら……カリーヌ様から聞いたわ……おめでとう……」

「デイ……エル……お前………にこれを……」

ジャラ……

『これは…一体？』

親父は俺に小さな六角形のルビーとサファイアのペンダントを母さんは鍵を渡した。

「お前が……………帰って来たら渡そうと……………思って……………いたペン
ダントと……………地下の倉の鍵だ……………後を頼む……………」

生きる……………「ディエル」

「ディエル……………貴方は……………一人じ……………ないわ……………」

母さんは血まみれたの体で俺を抱きしめ親父は俺の頭を鮮血で染ま
ったゴツゴツした手で撫でた……………がすぐに力が消えた……………」

『……………父上？母上？しっかりして下さいー！？』

親父達は俺の傍で息を引き取った。

親父達は暗殺された…それも相当な実力者に……

『リックさん…明日私はヴァリエール公爵のところに行ってきますから…屋敷を頼みます。』

「わかりました。すみませんディエル様……」

『いいですよ…おやすみなさい』

「おやすみなさいませ」俺はその後寝室にて眠りに就いた………けれども…何故か涙の一滴も流れてこなかった………

翌朝スーツを模した正装に着替えてからヴァリエール公爵のところに向かった。

親父達が死んだとこの報告と家督は俺が継ぐということの報告だ…
…

今……俺はヴァリエール公爵の執務室にいる。

俺の目の前にはヴァリエール公爵とカリーヌ様、エレオノール様とカトレア様にルイズ、公爵の執事のジエロームさんがいる。

「デイエル…火急の話とは一体？」

『昨日……父上と母上が……亡くなりました……』

公爵の質問に俺がそう返した。

「なんだと!？」皆……目を見開き驚いている。

『私が8日前から命じられている昨日迄の1週間の山籠りから帰還した時には……父上と母上は血塗れになって倒れており……屋敷で懸命に看護をしましたが……亡くなりました。恐らくはかなりの手練れの刺客により暗殺されたかと……』

周りに気づかれずに親父達を殺すと言うなれば相当な実力者であることは間違いない

恐らくは“風”のメイジだろう

「バカな！？あの2人はそう簡単には殺られん……お主の山籠りの件はカリー又より聞いている……………」

公爵はそう言って虚空を見上げた。

部屋には沈黙が重く居座っている。

「まるで……………我が片腕を亡くしたようなものだ……………ディエルよ……………」

お前はこれからびひするん……………」

『私は……………家督を継ぎフリーン家を継ぐことと考えております……………』

「そうか……………辛い道となるかも知れないが頑張ってくれ。……………今夜は我が家に泊まって行きなさい。今後…必要があれば支えてやるわ……………」

ヴァリエール公爵はそう言った……………

『有難き御言葉にございます。閣下……………この御恩はこのディエール……………一生忘れません……………』

それとこれは父上と母上からの手紙にございます。閣下とカリーヌ様宛に書かれており書斎の机の引き出しの中に取りましたので僭越ながらお受け取り頂きたく存じます』

公爵の言葉に俺は涙が出そうになったが必死に堪えてそう言った。

「ありがとうございます…ディエル…ジェローム…彼を来客用の部屋に案内しなさい……」

「畏まりました……」

『では自分はこのにて失礼します…ジェロームさんお願いします…』

俺は一礼をして退室し……ジェロームさんに来客用の部屋へと案内された。

S I D E 公 爵

ディエルがリンクとハンナが暗殺されたという訃報を持って屋敷にやってきた……

「まるで我が片腕を亡くしたようなものだ……」
ディエルよ………

お前はこれからどうする？」

『私は………家督を継ぎフリーリン家を継ぐかと考えております………』

ディエルは頭を下げたままだが力強くそう言った。

これが11歳の子供が出せる覇気だろうか……

そして彼は私とカーリー又に手紙を渡して退室した……

今にも泣きそうな目をしながら……かなり思い詰めたような表情であった……

それを感じ取ったのは私の他にはカーリー又とエレオノールだけかもしれない……

リンクからの手紙にはこう書かれていた……

「旦那様

この度は息子のことを思い筆を取らせていただきまして……

私とハンナの身にもしもの事がありましたらデイエルのことをどうかよろしく願います……」とだけ書かれていた。

カリヌの内容はほぼ同じだった。

リンク…ハンナ…お前達の子供の歩む未来…私達が見守ってやろう

S I D E
デ イ エ ル

俺は来客用の部屋に行った後夕食を公爵家と食べてから入浴し部屋の窓を開けてベッドで寛いでいる……

コンコン……

突如ドアがノックされた……こんな時間に来客か？

今は時間は深夜だ……普通は来客のある時間でもない……

『はい！どなたですか？』

俺は窓を閉めてそう返した。

「エレオノールよ…入っていいかしら？」

来客はエレオノール様だった……

『どつぞ……お入り下さい』

俺はドアノブを掴んで鍵を回してドアを開き……彼女を中に招いた。

俺とエレオノール様はベッドに腰掛けている。

「寝れそうかなと思ったの…昨日今日と大変そうだったから……………」

『今日は色々と御世話になりました。なんと御礼をすればいいのやら…………返す言葉もございません』

エレオノール様は魔法学院を卒業して王立のアカデミーに勤めている。

魔法学院時代には座学実技ともにトップの成績を誇る才色兼備の公爵家に相応しい才女……………

アカデミーでもかなりの地位にいる…………俺とは住む世界が違うんだ…………

色んな意味で憧れている人だ。

ギュッ
.....

.....へ？

突如エレオノール様が俺を抱きしめた。ちょうど俺の顔がエレオノール様の胸に埋まる形だ。

「辛かったですしょう？」

今はこの部屋には《サイレンス》をかけておいたから音は外には漏れないわ……………鍵もかけたわ……

よく我慢したわねディエル……

だから……………貴方は泣いていいのよ？」彼女は俺を抱きしめ、頭を優しく撫でながらそう聖母のような慈愛を籠った表情で言った。

普段の彼女ならば考えられないその表情……………それは実の妹のルイズにも見せない表情なのだ……………

『ヒック……………ヒック……………ヒック……………うわあああああ！うわああああああん！』

エレオノール様のその言葉に俺の心の堰が決壊した……

執務室でも目に涙が浮かぶのを堪えるのが精一杯だった……

俺は体面も捨てて大声を上げながら子供のように泣いた……

家督を継ぎフリーン家の当主となるのだから泣いてはいけないと考
えていた……

いつの間にか……多分俺はあの時……親父達の最期から瞬時に涙腺
を封じ込めていた……

泣くことを許してくれた彼女のその言葉は今の俺には何よりも嬉しいものだった……………

魔法とか剣術とか…親父達にはまだまだ教えてもらってないことが
沢山あったから……………

前に死んだときと似た後悔からのか……………

親父達を喪^{うしな}ったことが悲しい……………

けれども今……………彼女がここで泣かしてくれたことが何よりも嬉しい

い………

ただその二つの感情だけが俺の心の中を埋め尽くした………

俺はその晩眠りに就くまで……涙が枯れるまで泣き続けていた………

あの時程人の温もりを心地よいと感じたことはなかった。

チュンチュン……………チュンチュン……………パタパタパタパタパ
タパタパタパタパタ……………

翌朝…窓の外から流れてくる小鳥の甲高い鳴き声と羽ばたきの音、
部屋の窓から差す陽射しにより俺は目を覚ました……………

!!……………な……………なななななんだこの状況は—————??

キギキギキギキギ……………

俺は一度首を錆びかかったネジのように動かして目の前にあるものを見た。

目の前にいるのはエレオノール様だ。今も規則正しくすーすーと寝息をたてている……

俺は今エレオノール様に抱きしめられた状況にいる……

しかもベッドの上で向かい合いながら……

恐らくは昨晚俺は彼女に抱きしめられたまま……泣き疲れて眠ってしまったのだろっ……

俺は早く彼女の両腕と胸から脱け出さなければならぬ……………この状況から逃げ出すことはhave toでもありmustでもあるのだ……………

理由は主に2つ……………

まずは公爵がカリィ又様にバレたら俺の人生が終わって（ 比喻無しで）家督を継ぐどころじゃなくなるから

公爵とカリィ又様2人の手にかかれれば俺はハンバーグの豚挽き肉そっくりの人間ミンチになるかもしれない……………

いやミンチになるというよりはルイズの爆発も喰らわされてミンチどころか原子とかのクラスまでに破壊されるかもしれない……………

公爵、カリィ又様はともに風の使い手でさらにはスクウェア

カリーヌ様に至っては女性ながらトリステインの“マンティコア隊”の先代隊長という手練れだ……

今………俺の目の前にいるのがカトレア様ではなくエレオノール様でよかったとしみじみと思う………

なぜならカトレア様は体が弱いからとはいえ屋敷から殆ど出ないお淑やかな箱入り娘だ………

そうなればさらにあの2人の怒りのボルテージは上がりルイズの怒りも急上昇するだろう……

なぜならルイズはカトレア様のことをちいねえさまと呼び………

シスコン並に甘えている………

カトレア様の場合はエレオノール様も入ってくるか……

そうなる就先ほどの御陀仏（ 比喩無し ）が現実になりかねんだ

……

2つ目は早めに領地に戻り経営をしなければならぬからだ…

ボスが消えて不在のままというのは百害あって一利なしだ…

しかし脱け出さなければいずれにせよ彼女を起こしてはならない……
彼女は俺の大泣きのせいで睡眠不足になっているかもしれないのだ

……

俺と彼女に影響なく脱出は……不可能だった。

ガサ……………ガサ……………

「おはよう……………ディエル」

『おおお……………おはようございます……………エレオノール様……………
……………／／／／／』突如昨晚のことを思い出してしまったために俺
は顔が真っ赤になった……………

「フフ……………昨日のことなら気にしないでいいわ……………朝食があるから
支度をなさい……………」

『わ…わわ…わかりました』

彼女はそのまま退出しそして俺は予備の正装に着替えて朝食をともにした。

そして朝食の後……………

俺は公爵家の門に自分の愛馬を待たせていた。血に染まったような赤い毛並みの馬だ。

『皆様…昨日は何から何までありがとうございました。この御恩は生涯忘れません。両親の跡を継ぎ必ずや立派な領主となって見せませ……』

「頑張りなさい……ディエル」「やはり父親がじゃじゃ馬乗りなら息子もじゃじゃ馬乗りだな……全く……血は争えんか……」

『閣下……じゃじゃ馬乗りとは一体何のことでしょうか？』

「実はリンクの昔の愛馬は名をブレットと言ってな黒い毛並みでかなりじゃじゃ馬だったのだが……かなり前に死んでいる……お前のもかなりのじゃじゃ馬だろう？紅蓮のような毛並みだ……」

俺の返しに公爵は呆れを含みながらも微笑みながらそう言った。

『はい……乗りこなすのに3年かかりました。セキトと名付けました。』

無論…この名は前世の中国史屈指の名馬…かの三國志の名將關羽雲長と呂布奉先の愛馬「赤兔馬」から取っている。

こいつもその名に恥じぬ駿馬である。

「辛いこともあるかもしれないけれども頑張りなさい」

「き…きき期待してるからね」

ピンクの髪の姉妹がそう言った。

「礼儀作法ならいつでも教えてやるっ…」

ジェロームさんはそう言ってくれた。

面倒だけど…最低限の社交辞令くらいは学んどこっかな？

「デイエル…辛かったらいつでも来なさい……………」

エレオノール様は俺の唇にそっと触れるだけのキスをした。

「っか何でだろ？このルイズとの扱いの違い……………嬉しいっちなや
嬉しいんだが……………うむ……………わからぬ……………」

ほんの一瞬触れるだけの…俺のファーストキスだった

俺は昨晚よろしく思考が停止して顔が自分でもわかるくらいに熱く
なった………

だが思考の停止はほんの数秒だった………

ギーン！！！

領地経営と異邦人との出会い

ヴァリエール公爵の屋敷から帰宅したその日から俺は領地経営に取り掛かった……

まず始めに行ったのは領内の財政の把握……

前世が会社員……しかも経理部だった俺には楽な作業だったが

……

一つ驚くべき事実がわかった。

この土地は農作物の納税の割合が八割と設定されているが実質的な収入は六割しかなかった……

考えられるのは徴税官らによる横領と文官の連中による偽装工作……

領地の軍や騎士団を特捜部紛いな捜査に使い裏付けに2ヶ月を費やした。

確かにこの世界では軍隊＝警察的な感じになっている……

俺は今日…屋敷に領地の徴税官全員と文官…さらには領内の教会の神官、司祭の連中を呼び集めた…

『さて…今日皆を呼んだのは他でもない……納税に関してだが…君たちの税金の取り方、財務の報告書の作り方を教えて貰おうかな……ただこの場の会話はすべて私の執事に記録をしてもらってから虚偽の証言のないように願いたい……』

俺の手元には裏付けた証拠による報告書があり…彼らの罪状は確定しているが彼らの自白は何よりも決定的になる。

『まさか私がまだ11歳の子供だからといってくれぐれも「貴方は幼いからわかりません」などの言い訳もしないでくれたまえ？私は一切手は抜かないからな？』

俺は内側の怒りを抑え渾身（ここ重要）の微笑みを彼らに向けた。

「あのですね……………」

彼らは一斉に口を閉ざした。

『説明が出来ぬようなら私が言ってやるっ…』

まず貴様ら民から搾取した税金の2割を懐に入れ分配し、さらには文官と結託し財務の報告書をも偽造した。

司祭や神官の貴様等も同罪だ……民から“寄付金”などと言いなから結託して金を搾取し自らの懐にいれ私腹を肥やしていた……

証拠は揃っている……もはや貴様らは逃げられん……貴様らに最後に問おう……

……貴様らにとって民とはなんだ？』

「……ふん！成り上がり者の息子が貴族の真似事をしおって！！民とはなんだ？だと……片腹痛いわ！平民なんざ我々の隷属種……魔法が使えぬ愚かな者どもだ！！」

「そつだ！この成り上がり者の息子が！！」

「始祖ブリミルのお導きを解らぬ成り上がりが！！」奴らは俺の最大限の侮蔑を込めた視線と宣告に耐えられなかったのか自白まがい

の反論をした……

許せねえ……

『黙れ!!』

俺は怒りの余り握った拳を執務室の椅子のひじ掛けに叩きつけそう怒鳴った……

『平民は奴隷だと？

貴様らは何もわかっちゃいねえ!!

俺は知っている……民は魔法など使えなくとも……その日その日を精一杯生きているのを!!

この家のコックの人達は貴様らから見れば確かに平民だ……

だが魔法を使う我々メイジよりも遥かに美味しい料理を作れる!!

その技術も魔法に頼らない……彼らの“力”の結晶だ!!

執事もメイドの人達も効率よく我々を助けてくれる……

農民も商人も鍛冶職人も然り!

彼らは魔法などなくともしっかりと大地に足を着けて……日々を生きている!!

確かに始祖は我々メイジに魔法をもたらした……

しかし…その始祖の名を語り清貧を声高に叫び民から搾取することに酔いしれ…始祖の名を貶めた貴様らは司祭や神官ではない！！

領地は魔法や宗教により成り立っているのではない！！

この地に我ら“人”がいるから成り立っているのだ！！

それを忘れて民を苦しめ…あまつさえ今亡き我が両親を侮辱したことは許さん！！

117

ヴィッツ騎士団長！神官以外を拘束しろ！！

トレング副団長は司祭と神官どもを領地から追放しろ！金輪際この領地には入れさせるな！！』

「了解！」

ドアから茶髪と金髪の青年が部下の騎士達を連れて来て全員を連行していった。

茶髪の青年の名は

ギルフォード・ヴィッツ

フリーン家の所有する騎士団フリーン騎士団の団長を務める風のトライアングルメイジだ。

メイジの身でありながら槍の名手だ。

実家は下級貴族で彼は三男だったが親父と母さんが登用したとか…

性格は堅物を絵に描いたような人で両親に忠誠を誓った人だ。

金髪の青年は
デューク・トレング

騎士団の副団長を務める火のラインメイジで弓の名手。

彼は気さくでおおらかな人でこの人も親父達が登用したとか…

『ヴァステイ副団長は伝令兵を使いこのリストにある者達に連絡を取り明後日の昼間にこの屋敷に来るように伝えてくれ。』

「はっ」

俺はさらに緑色の髪をした青年に指示を出した。

彼はヴァステイ

騎士団の副団長を務める土のトライアングルメイジ。

どこかの貴族の私生児だったが親父が拾って育て上げた叩き上げの騎士だ。

戦略眼が良く騎士団の参謀的な役割を担っている

フリーン家の騎士団は大抵が親父達が育て上げた騎士で下級貴族の次男や三男がほとんど…

騎士団と言っても貴族のみではなく平民の騎士もいる

彼らは魔法は使えなくとも武器の扱いと騎士であることを活かしたスピード戦に特化している……

俺は武道の修行でよく騎士団の人達にはお世話になった。

両親の威光のお蔭で俺が新たな領主となって命令を出しても嫌な顔をしなくてくれる。

2日後……

俺がリストに選んだ人物が屋敷に来た。

その人物とは領内の4つの村の村長と中心都市の町長、下級貴族の副徴税官と文官達だ。

『君たちを呼んだのは他でもない……まずは先日我々が処分した徴税官と文官、神官どものことに関してだ……』

まずは各村長と町長の方々には徴税件で迷惑をかけた……すまなかった。謝らせてくれ』

俺は椅子から立ち上がり頭を下げた。

「……り領主様頭をお上げ下さい」

『そう言ってくれると嬉しい……そして今回の件のお詫びといって

はなんだが来年から農作物への税率を8割から6割に下げることが約束しよう。今回の処分により6割でも領地の財務は黒字化できることがわかったからな……………」

『あと小麦がなかなか取れないが豆がよく収穫できる地帯があると聞いているが本当か？』「あ…ありがとうございます！確かにそのような土地はありますが私どもは毎回納税の際には断られています…：…なんでも「貴族は豆など食わん」だとか……………」

『チツ…あの野郎ども…豆もなかなか旨いものなのに…：…わかった…その土地に限り来年からは豆での納税を許可しよう…豆とて重要な大地の恵みであり我々の貴重な食料だ…：…あと山賊や盗賊の被害があったり飢饉になったらこちらに連絡をしてくれ…何らかの措置を取るう…：…』

“元”日本人である俺にとって豆はかなり食べ慣れた食料であり健康的な食材でもある……………」

「本当に…何から何までありがとうございます！」

村長達は本当に嬉しそうな笑みをしていた。

「あの〜領主様：我々は一体？」

呼び出した文官の一人が口を開いた。

ごめん……納税関係に夢中になってたから……完全に存在が空気化してたね……

『君たちを呼んだのは君たちの昇進の件だ……』

まずは副徴税官の諸君はしっかりと税率を守り規律に沿った徴税をしていた。その点を評価し君たちを徴税官に任命する。

それと文官の諸君は実に良くできた報告書と会計、事務を行っていた。その点を評価し君たちには主任へと昇進させよう。

君たちの変わらぬ働きに期待しているぞ。』

「り……領主様……大変嬉しいお話です……しかし我々は下級の貴族ですが……」

一人の文官がそう返してきた……

確かに彼の意見に一理ある……ハルケギニア……特にトリスティンでは家柄重視の傾向がある……

拘束した徴税官や文官は王政府から派遣された人物で中級の貴族だ

……

彼らからしたら何かのドツキリかと思ったのだろう……

『私は君たちの家柄ではなく実力を評価しているのだ……』

君たちは上の者達が墮落するなかその誘惑に負けず堅実に自分の仕事に取り組んできた……

君たちのその努力と実力には私は報いよう……これからもこの領地のために力を貸してくれ……頼む……！」

何度も言うがトリスティンでは家柄を重視する傾向が強い……しかし隣国のゲルマニア帝国は違う。

平民でも金で貴族の地位と領地を買ったことが出来る国家だ……

そのシステム故かトリスティンの貴族はゲルマニアを成り上がりの野蛮人と呼び蔑んでいる……

だがこの領地にはその実力主義を少しずつ導入していけば優れた人材が生まれる確率が増え領地の繁栄に繋がるからだ。

俺は前世の知識もフル活用して領地の改革に取り組んでいる……

「あ……ありがとうございます！精一杯役割を果たします！」

貴族達は目に涙を浮かべていた……

『頑張ってくれ……期待しているぞ……村長の方々も今日は来てくれてありがとうございます……これで話は終わりだ……お疲れ様でした』

「ありがとうございます……！」

彼らは喜びながら屋敷をあとにいった。

ふう……領主の“顔”は疲れる……

S I D E ・ ヴ ィ ッ ツ

リンク様とハンナ様のご子息のディエル様は実に変わった方だ……

…

リンク様の影響か……貴族の身でありながら武道に関してはかなり熱心に打ち込んでいる。

特に槍術に関しては騎士団の団長の職務についている私でも勝てないくらいの實力になっている……

平民の武器とメイジや貴族の蔑む槍、刀、弓等々……

彼は貴族でありながらもそんなことには目もくれず必死に鍛練をしていた。

ハンナ様から魔法があまり得意ではないことは知っていた…

普通の貴族ならば諦めたり塞ぎ込んでいるが彼は努力をし続けていた。

その視線の先には私を育て上げてくれた彼の父親であるリンク様やハンナ様の背中があったのかも知れない…

そして突如2人が亡くなってから2ヶ月後……

彼は領内の墮落した貴族や神官達を一斉に処分した。

財務の報告書を見てそれに気づいたその勳は恐るべきものだった。

というよりは“物の見方”が違った……

「ふん！成り上がり者の息子が貴族の真似事をしおって……民とはなんだ？だと……片腹痛いわ！平民なんざ我々の隷属種なのだ……魔法が使えぬ愚かな者どもだ！！」

「そつだ！この成り上がり者の息子が！！」

「始祖ブリミルのお導きを解らぬ成り上がりが！！」

奴らは彼の侮蔑を惜しげもなく込めた視線と宣告に耐えられなかったのか見苦しくも自白まがいの反論をした。

私や騎士団の皆を育て上げてくれたあのお一方を侮辱されたことが悔しかった……だが……

『黙れ!!』

『平民は奴隷だと？貴様らは何もわかつちやいない!!』

私は……俺は知っている……民は魔法など使えなくとも……その日その日を精一杯生きているのを!!

この家のコックの人達は貴様らから見れば確かに平民だ……

だが魔法を使う我々メイジよりも遥かに美味しい料理を作れる!!

その技術は魔法に頼らない……彼らの“力”の結晶だ!!

執事もメイドの人達も効率よく我々を支援してくれている……

農民も商人も鍛冶職人もまた然り！！

彼らは魔法などなくとも……地にしっかりと足を着けて……日々を生きている！！

確かに始祖は我々メイジに魔法をもたらした方だ……

しかしその始祖の名を語り清貧を声高に叫び民から搾取することに酔いしれ……始祖の名を貶めた貴様らは司祭や神官などではない！！

領地は魔法や宗教により成り立っているのではない！！

この地に我ら“人”がいるから成り立っているのだ!!

それを忘れて民を苦しめ…あまつさえ今亡き我が両親を侮辱したことは許さん!!

ヴィッツ騎士団長! 神官以外を拘束しろ!!

トレング副団長は司祭と神官どもを領地から追放しろ!! 金輪際この領地には入れさせるな!! 『

こう一喝した。彼の叫びに私は鳥肌が立った…

少なくともただか11歳の子供の出せる迫力ではない

私は三男で平民同然だった……だがあの2人に騎士へと育て上げていただいた。

あの時の2人の優しさは忘れられないものだ……

私は改めてこの人についていこうと思った。

「了解!!」

隣にいたデュークと返事が何故か重なった。

恐らく奴も私と同じ思いなのだろう…

目に輝きがあった……

私達はお互いを一瞥しすぐさま罪人を捕縛した。

リンク様：ハンナ様：育てて頂きありがとうございます。
この誇り高き君主に仕えられることは騎士たる私の生涯の誉れに
ございます

私は今はここにいない2人の大恩人に御礼を申し上げます。

S I D E
デ
ィ
エ
ル

『し馳走さまでした』

俺はヴィッツ騎士団長、トレング、ヴァステイ副団長との夕食を終えた。

フリーン家の食事は貴族の中ではかなり質素な部類にあたる。

穀物や根菜類をお粥にしたりとした主食に肉と野菜を炒めただけとかの主菜にスープの汁物の一汁一菜が基本だ。

味はかなり薄く盛り付けも少ない…… 『今日も美味しかったです、ナバリー料理長』

「カッカッカ!! そう言ってくれっと嬉しいねえ!! ありがとな
ディエル様!!」

ナバリー料理長は俺の背中をバシバシと叩いてきた。

ナバリー料理長

俺がこの家に生まれてからずっといるコック長だ。

彼は熊のような体格だが優しい味の料理を作る凄腕の元トリステイ
ンの王宮コックで性格はかなり豪快だ。

王宮のコックをクビになった彼を母さんが引き抜いてきた。

この人の料理は王宮では味が薄いと盛付けがみすばらしいとか
言われていたらしいが俺はそうは思わない。因みにそれがクビの理
由らしい……

密かにカリー又様やヴァリエール公爵もお気に入りで……

「そう言えばよディエル様ア」

『どつしたんですか?』

「さっきヴィッツ団長から聞いたんだけど今度から豆も納税していよいよにするって本当かい?」

『はい、豆も大切な大地の恵みですから…それが一体どつしたんですか?』

「あのよ…昔ハンナ様から聞いた話なんだけどこの屋敷の倉に東方かどつかの豆を使った調味料の作り方が載っかってる本があるんだつてよ……」

『本当ですか?母上からそのような話は聞いてませんので……』

寝耳に水だ……

そろそろ開けてもいいかも知れないな…

俺は翌朝屋敷の地下倉庫に来ていた。

親父が俺に託した鍵……

なんの装飾も施されずただ紐を通すための小さな丸い穴が空いているだけの鍵……

俺の後ろにはヴィッツ団長とヴァスティ、トレング副長とリックさんがいる……

ガチャ…ギギギギギ

俺は鍵穴に鍵を差して回し重い鉄の扉を開けた。

ヴィッツ団長が《ライト》を使い倉庫に灯りを灯した。

『これは……………』

俺達は言葉を失った…………

いや失うしかなかった…………

そこにあったのは山のような本だった…………

俺はその中のある新しい本と巻物を手に取った…………

『……………嘘だろ?』

俺はその2つのタイトルに目を疑った…

そこにあっただのは……………

「孫子の兵法」

前の世界では超有名な兵法書…

三國志の知勇兼備の英傑にして魏の創始者曹丕の父親、また「孟徳新書」の著者―曹操孟徳

川中島の決戦と騎馬隊、風林火山の旗と軍師山本勘助で有名な戦国

時代の甲斐の戦国大名―武田信玄

コルシカ島の小貴族からフランス革命後に腐敗した総裁政府を倒し
―時期皇帝となりフランスを治めるまでに登り詰めたフランス陸軍
の将軍―ナポレオン・ボナパルト

彼らを始めとした名将等が愛読書とした十三篇からなり、

141

前世の現代においても政治やビジネスに利用できるとされた書物

かの遙か昔、中国の春秋戦国時代の呉の大軍師―孫子こと孫武とそ
の孫が記した兵法書……

それが何故こんなところに存在する？

いや…それ以前に何故親父達がこれを持っている？

まさか親父と母さんは……………これが兵法書であることを知っていたのか？

いや…それならば親父と母さんはこの文字を読まなければならない

……

全く検討がつかなかった……

孫子の兵法は漢文の文体「鏡花水月」のものと英語、日本語に訳されたものが13篇ずつ保管されていた。

そして孫子の兵法だけではなく前世の哲学書等の様々な書物があった……

そして俺は倉庫の奥に進んだ……

そこには2つの小さな木の箱があった……

『じいじは……一体？』

「ディエル様……………この箱は一体？」

「どういたしましょう？」 「何があるんだ？」

「ディエル様……………」

後ろの人々が口々に言う。

木箱には小さな丸い窪みがあった……………

片方は底がちりばめたルビーにもう一方は底がサファイアに覆われていた。

ルビーの箱の縁には「母」

サファイアの箱の縁には「父」とハルケギニアの言葉で書かれていた。

ルビー……………サファイア……………

母……………父……………

俺の脳内にはある考えが浮かんだ。

俺はあの日から首に掛けていたペンダントを同じ色の縁にはめた。

するじ…

キギキギキギ……………

木箱は一瞬だけ閃光を放ち音を立てて自ら開いた。

そこにあっただのは…50センチと30センチ程の武骨な鉄の杖……

……

その1つずつに小さな手紙が添えられていた。

俺はそれらを取り出して封を切って読んだ……………

『！……………父上！…母上……………』

読み終わった時俺はいつの間にか膝をつき目からは涙が零れていた。

『父……………上……………母……………上……………ありがとう……………
い……………ます……………』

俺は声を殺して泣いていた。

そこには……

「息子ディエルへ…

私は長くないかもしれない………

お前にはまだ叩き込んでいない事が山のようにある………

私の後を継ぐお前は王宮から目をつけられ冷遇されるかもしれない

お前の人生は修羅の道となるだろう………

だからお前にはこの杖を贈ろう

この杖には特殊な魔法がかけてある……………

話していなかったが私は元アルビオンの貴族の息子だ……………

私の魔法の力全てと引き換えに創った杖だ……………

お前の望む《剣》……………

それをその杖との契約の際にお前の脳裏に浮かべよ……………

契約がなされればその杖はお前の魔力に呼応しお前の望む《剣》へと姿を変えるだろう……

それがお前の未来を切り拓くための《剣》となることを祈る…

そしてお前の未来に幸せがあらんことを……

親バカかも知れんが……お前には不思議な雰囲気漂っているように感じた。

お前ならこの書物を解読できるかもしれない……

この書物は私とハンナが王軍の時代から集めたものだ。何かの役に立つだろう……

お前が何者でも私にとっては大切な自慢の息子だ……

「……………父リンク・シュヴァリエ・ド・フリーンよ
り」

そして30サントの杖の方には……

「息子のディエルへ」

私は長くないかもしれないわ……

戦場を駆け体を酷使してきたから当然かもしれないわね……

この杖にはリンクからのものと同じように特殊な魔法をかけてあるわ

.....

私の魔力半分を引き換えにして創った杖よ.....

リンクの杖が《剣》であるならばこの杖は《槍》.....

2日に分けて1日に一本ずつ契約をなさい.....

契約の際には貴方の望む《槍》を頭に浮かべなさい

契約が成功すればこの杖は貴方の魔力に応えて貴方の望む《槍》となるでしょう.....

この《槍》が貴方の未来の壁を貫く《槍》になることを祈ります……

でも何よりもまずは貴方の人生に幸せがあることを祈るわ……

……

「……………母“炎華”ハンナ・シュヴァリエ・ド・マ
ハードより」

と書かれていた。

杖を見つけた翌日から遺言通り2日を俺は杖の契約に使った。

親父からの50サントの杖には関羽雲長の愛した刀「青龍堰月刀」
を……………

母さんからの30サントの杖にはランサーことクーフリーンの愛槍
「ゲイ・ボルグ」を……………

俺の脳内に浮かべて契約した……………

そしてあれからさらに3ヶ月後……………

執務室にてデスクワークをしていた俺のところにある知らせが届い
た……………

「ヴィングラードの町の外れに見たことのない奇妙な格好をした男
達が倒れている…どうやらどこかの軍人らしい」と……………

ヴィングレードとはフリーン家の領地の首都的な中心地であり商工業が発達している町だ。

俺の屋敷や騎士団の修練所もこのヴィングレードの中心にある

『わかった………リックさん……その者達をこの屋敷に招いてくれ………話がしたい………』

「畏まりました……手配をいたします……」

『ありがとう………』

リックさんには俺の秘書としてデスクワークを手伝ってもらっている。

俺はいつの間にか12歳になっていた。

内政にメスを入れたがまだフリーン家の領地の諸侯軍などの問題が山のように残っていた……

『それにしてもルシファー……どうするよ？』

何をだア？

俺は腰に帯刀しているルシファーに話しかけた……

ルシファー……普段静かなのは嬉しいけれども……もう少しガラを良くしてくれ……どこぞの不良君ですか君は？

『諸侯軍の再編と強化……騎士団は大丈夫なんだけど……特に民兵の錬度がな……教官がいないし私じゃ軍のカリキュラムは立てられないから困ってんだよ……メイジ部隊にもせめてナイフの技術ぐらい身につけてくれれば戦力になるんだけど……』あの日から俺はルシファーを受け継ぎできる限り帯刀している……

そりゃな……王軍でもねえから士官学校なんてないからな……

ルシファーの言うことは尤もだ……兵士を育てるなら士官学校が一番なんだが……一下級貴族には作れない……問題はそれだけじゃあない……

『そうなんだよ……しかも砲撃部隊2つの隊長の椅子が不在なんだけど適材がいなくてね……これじゃ演習もできやしない……土木部隊も作んなきゃマズイしな……あの軍人らしい不審者をヘッドハンティング……でもしよっかな……』

軍の存在は治安維持の観点からすれば絶対的に必要になってくる……

平和だ何だと言って山賊とかを防げなくて守れないならば武力という名の“悪”であつても民を守れる方が数倍マシなのだ……

ましてやハルケギニアは真面目に中世ヨーロッパ……山賊なんてあると考えなきゃいけない……

俺はこの問題に今日一日中頭を抱えていた。

そして翌日……その彼らが屋敷にやってきた。

コンコン

「失礼します……ディエル様……リックです……例の方々を連れて参りました……」

『わかりました。入って下さい……………』

「畏まりました…どうぞお入り下さい…」 5人の男女が入室してきました。

『皆さん、ようこそ我が屋敷へ……………私はディエル・メディナクー・ド・フリーンと申します。この一帯の領主をしています。左にいるのは左からフリーン騎士団のヴィッツ騎士団長、トレング副団長、ヴァステイ副団長です。』

「フリーン騎士団の団長のギルフォード・ヴィッツだ。よろしく頼む…」

「副長のデューク・トレングだ。よろしくお願ひします」

「同じく副長のヴァステイだ…よろしく」

俺達が礼をすると向こうも会釈で返してきた。

『お座り下さい…それではまず始めに皆さんの所属、階級、お名前を教えてください…』

「はっ！本官はアメリカ合衆国太平洋艦隊所属駆逐艦「グングニル」艦長のカイリ・グレー中佐であります！！この度はこのようないご配慮感謝いたします…」

スキンヘッドの男が敬礼をしながらそう言った。

「本官はグレー中佐と同じく駆逐艦「グングニル」艦長補佐のラン・ナーリング中尉であります！」

黒髪のショートカットの髪に眼鏡の理知的な女性も立ち上がり敬礼をしながらそう言った。

どうやらグレー中佐の副官のようだ。

「アメリカ合衆国第六艦隊所属艦「ジャスティス」副艦長のケン・リックカード少佐であります!!」

茶髪の坊主頭の男性も敬礼をした。

いや…坊主に茶髪も何も関係ないか……

この人も艦長クラスか……今ごろアメリカ海軍は大騒ぎだろうな……

アメリカ攻めてこないよね？

それにしても種ガンの核エンジンMSと艦の名前が同じなのは気のせいかな？

「アメリカ合衆国陸軍第3師団所属第1砲撃隊長ボブ・ライランス大尉であります!!」

「同じくアメリカ合衆国陸軍第3師団所属第2砲撃部隊隊長のエドワード・ヴィッター大尉であります!!」

赤みがかった茶髪と金髪の男性も同じように挨拶をした。

全員アメリカ合衆国の軍人だった。

全員が長のつく役職でさらには砲撃部隊の隊長がいたのは幸いだ…
これで一気に人事問題にカタがつく……………

「わかりました…グレー中佐にナーリング中尉にリックカード少佐、

ライランス大尉にヴィッター大尉ですね……こちら……ハルケギニアについては何かご存知ですか？』

「いえ……まったく皆目検討がつきません。気がついたら我々はここにいます……」

やはりそうか……

『わかりました……皆さんの衣食住はこちらで保証しますが……ところで皆さんは士官学校で教官の経験がありますか？』

「ありません……しかし本官とラン、ケン少佐は海兵隊の士官学校でボブとエドワードは陸軍の士官学校で訓練を積んでおります。」

チツ……さすがにこの若さで教官はないか……

だが彼らの士官学校時代の訓練内容は参考になる

『そうですか…では皆さん…我々の軍で働きませんか？今軍の再編に着手していて人手が足りないのです…貴方方の士官学校の訓練を参考にして訓練のカリキュラムを立てたいのですが……どうでしょうか？』

「ありがたいお話ではありますが…しかし我々でよいのでしょうか？」 『私ではカリキュラムは立てられないので皆さんの知識をお借りしたいのです……それに今は一人でも多くの人材が必要なのです……お願いします！…！』

アメリカ合衆国海兵隊の訓練はかなりきついか……
だが民兵の錬度をあげるにはこれは最適かも知れん

グレー中佐は少し黙り込み全員でアイコンタクトを交わした後、口を開いた。

「わかりました…喜んでそのお役目受けさせていただきます。」

『よろしくお願ひします…グレー中佐……いえ…カイリさん』

俺とカイリさんは手を握りあつた。

まるで商談が決まったときのような感じだな……

こうして俺達には新たに異邦人の仲間ができた。

SIDEカイリ

気がついたら何処ともしれない土地に飛ばされていた。

ラン、ケン、ボブ、エドワードはハイスクール時代の同期だ。

自分と同じ艦に所属していたランはともかくケンやボブ、エドワードまで飛ばされているとは…

そしてこの土地の領主と会談した。

その領主はまだ子供だった。

だが部屋は洗練されていてとても子供の部屋とは思えなかった。

だが彼の後ろに立つ騎士達がこの子供がただ者ではないことを教えてくれていた。

まるで心から忠誠を誓ったような誇りに満ちた目。

さらにその少年は我々の衣食住を保証し、さらには我々に領軍で働かないかと提案してきた。

そしてまるで祈るように頭を下げてきた。

私はいつの間にか彼に手を差し出していた。

彼は微笑み感謝の言葉を言いながら私の左手を取っていた。

彼の手は年齢に不相応なほどゴツゴツしていた。

SIDE ディエル

「ディエル様：いいのですか？見ず知らずの人間を領軍に引き抜いても…他国の間者の可能性も否定できません…」 ヴイツツ団長がそう言ってきた。

うん……流石は騎士団一の堅物だな

『間者ならば倒れるような真似はしないし迷わずに飛び付いてくるはずですよ……彼らはハルケギニアの人ではないな……恐らく東方……いや異世界の人間だろうな……』

俺にとって…これは100%確実なのだが彼らには信用ができない
だろう……

「い……異世界ですか？」

『そつだよヴァステイ副長……証拠ならこの机の引き出しにある
から持つてこよう……』

俺は皆に微笑みながら立ち上がり領主用の実務的な机の一番下の引
き出しを開けた。

『カイリさん……貴方方の母国はアメリカ合衆国……The
United States of America……最初は
13の州からなる国家だったが現在は51の州からなる巨大な共和
制の民主主義国家……建国……いや……独立記念日は7月4日で初代
大統領はジョージ・ワシントン……あつてますよね？』

「は……はい、何故貴方がそれを？」

『秘密です……でも貴方方ならこれが何かわかる筈です……』』

俺は分厚い一冊の本を取り出して椅子に戻って彼らに差し出した。

スッ……

彼らは言葉を失っている。

そう……

俺が出した本のタイトルは……

「アメリカ合衆国憲法」

「ディエル様……………これは一体？」

『彼らの母国の「憲法」ってヤツを纏めた本だよ……憲法ってのは簡単に言えば国家の中でも最も重要とされる法律だ。因みにアメリカ合衆国には貴族はなく魔法も存在しない……………」』

「貴族がない上に魔法も存在しないですって!？」

ヴィッツ団長の間に俺はそう返した。

するとトレング副長が驚いたようにそう言った。うむ……予測通りの反応だな……ハルケギニアじゃ貴族のいない国家なんてあり得ないしね……………」

『だからさっき私は言ったでしょう? 「彼らはハルケギニアの人間ではない……………異世界の人間」だと……………」』

「……しかしそれだけでは証拠になりませぬぞ……ディエル様……」

ヴァステイ副長もそう反論した。

『では彼らの士官服に注目してみましよう……まずは材質……ハルケギニアではまずお目にかかることのない材質です。さらにこの文字ですがハルケギニアの文字とは似て非なるものです』

「しかし東方から来た可能性も捨てきれませんが……」

リックさんも反論してきた。

『でしたらゲルマニアやガリア、ロマリアの部隊に接触している、もしくは捕縛されている筈です……地域住民の証言からは突如現れたというのがありますから東方の可能性は少ないでしょうね……』

「となると……残る可能性は異世界ですか……」

『そうなりますね……どうですかカイリさん……わかっていただけましたか？』

「は……はい……我々の世界と陸の形は似ていますがも地形や国境は全く違っています。わからないことばかりで……」

憲法から目を離して答えたがまだ目には戸惑いの色が見えた……

『では貴方方にまずこの土地とハルケギニアについて、さらには文字の読み書きをお教えいたしましょう……リックさん……その役を頼んでも構いませんか？』

「はい……私も少し興味がそそられました。その役目喜んで引き受けましょう……」

『ありがとうございます……団長方も構いませんか？』

「確かにディエル様の仰ることは一理でございます…私も彼らに少しばかり興味が湧きました。」

「私もです…彼らは間者には見えませぬ…」

「確かに今は一人でも人材が欲しい時期ですからね……………」

『では今日はこれにて話し合いは終わりにです。リックさんは客室にカイリさん達を案内して下さい、団長方は軍の書類の精査をして下さい。お疲れ様でした。私は内政官との会議がありますから…』

「ありがとうございました……………」

こう挨拶した後に解散してその日の会談は終わったが俺はすぐさま馬小屋に行きセキトに乗って内政官との会議に出掛けた。

領主も中々大変な仕事だと最近漸く認識した。

侵略者と初陣と……

カイリさん達がウチの領地にやって来てから2年が過ぎた……

彼らはおうすつかりとこつちの生活にも馴染んでいる……

まさに“光陰矢の如し”……時の流れる速度は早いものだと思えて実感した。

さて……この二年間に俺が何をしたのかを列挙していこう。

まずはカイリさん達アメリカ軍の軍人をヘッドハンティングすることを始めとした領軍の再編……

民兵とメイジのトレーニングメニューはアメリカ陸海軍のを参考に
して作成した。

準備体操

ランニング（10キロぐらい）

筋トレ

サーベル、ナイフ教練

休憩

軽いランニング（2〜3キロ）

昼食を含めた昼休み

布陣訓練又は射撃訓練

対メイジ教練

軽いランニング（4～5キロ）

クールダウン

解散

って感じだ…

因みにメイジ部隊のトレーニングメニューも大体同じものだ……

だが対メイジ教練を連携訓練にしたりサーベルをレイピアに変更したりと区別はしているがナイフは高校の文理どっちでも習う英語よろしく必修内容にしている。

メイジ部隊からは最初はかなり不満というかブーイングがあったが
ヴィッツ団長の一喝により消えた。いや、流石団長……迫力あったな
、メイジ部隊の腰が引けてたよ………

対メイジ教練を入れたのは山賊や盗賊の討伐やもしものゲルマニア軍の進行に備えてだ。

なぜならド・フリーン家の領地はラ・ヴァリエール公爵と共にゲルマニア国境付近にあるからである。

さらに山賊、盗賊にはメイジが混じっていることがあるからだ。

そしてカイリさん達は以下のように配属させた。
カイリ・グレー中佐

ド・フリーリン領軍歩兵隊総隊長

ラン・ナーリング中尉

ド・フリーリン領軍突撃歩兵部隊隊長

ケン・リツカード少佐

ド・フリーリン領軍遊撃歩兵隊隊長

ボブ・ライランス大尉

ド・フリーリン領軍第一砲撃部隊隊長

エドワード・ヴィッター大尉

ド・フリーリン領軍第二砲撃部隊隊長

となった。

遊撃歩兵隊は機動力を主体とした歩兵隊で基本的な武器はサーベルとナイフ、さらには弓か銃だ。

突撃歩兵隊は読んで字の如しで突破力に重点をおいた歩兵部隊だ。こちらの基本的な武器も同じだ。

砲撃部隊は大砲や弓、火のメイジを中心とした砲撃、遠距離戦用の部隊だ。

何故二つあるかというと軍内に以外と火のメイジと大砲が多かった

ことが挙げられる。

治安維持とか雇用対策的に領内の没落したメイジを軍に入れてみたら大抵が火か風のメイジだったのだが……………

貴族、魔法至上主義のある連中は機動戦士ガダ（特にファーストらへん）よろしく思いつきで「修正」した…とくにケンとかカイルさんとかカイルさんが…

流石はアメリカ合衆国海兵隊……………

あと土木防衛部隊を新設した。

この部隊は土系統のメイジと工作兵を主体にした部隊で防衛陣や塹壕の作成等を遂行するために作られた部隊である。こういうときは本当に土系統は便利である…

まさに“縁の下の力持ち”とはよく言ったものである……………

彼らにも上記メニューは課しているが訓練の一環として領内の畑と

かの整備や測量をやらせている。

ぶっちゃけた話……

人件費とかの節約にも貢献している便利っというか万能な部隊だ…

正直言ってこいつらの役割はかなりありがたい……

サーベルとナイフは内需拡大的な感じで領内の鍛冶屋なんかに発注した後に軍のメイジ全員で《固定化》と《硬化》の魔法を何度も掛けさせた。

ナイフはアメリカ軍のアーミーナイフを参考にしている。

しかしこの発注で一気に数万から数十万エキューはぶっ飛んでしまったのは余談だ……

メイジ全員に《固定化》と《硬化》を掛けさせたのも訓練の一環……と表立ってはそう言っているが実際はただの人件費削減に他ならない……

そしてこの軍の再編により変わってきた点が幾つかある。

まずは軍内部の団結力の向上だ。

“同じ釜の飯”を食べて同じトレーニングメニューをこなすことで民兵とメイジ部隊の間にある程度の仲間意識っていうか団結力が生まれてきているらしい……

これは教官も兼任してもらっているカイリさん達からの報告によるものだが……喜ばしいことでもある。

やはり“飯の力”は偉大である……

こっちは米はないが……

あー白米でも玄米でも雑穀米でもなんでもいいから………米が食
いたい……

日本人は“米の味”を忘れないという逸話はあながち間違いではな
いかもしれない………

閑話休題……

さらには2月に一〜二回ぐらいのペースで俺の視察と騎士団と領軍
の合同演習を行うようになった………

しかも俺はその度に講評（っていうよりは演説）をしなければなら
なくなつた……

確かに連携の訓練としては最適ともいえるメニューだが俺にとっては面倒な仕事の一つ増えた。

さて…軍の話はここまでにして

次に行った点は領内の産業（特に工業）の活性化だ。

ウチの財政は西アジアのOPEC（石油輸出国機構）の加盟国の経済状態よろしく農林産業が収入の5〜6割を占めていた。さらには一年前から新たに徴税し始めた豆の利用法も問題であった…

豆は確かに売れば金にはなるのだが…それでは元の木阿弥どころかさら割合が上がってしまうために新たな産業を領内で興さなければならなくなったのだ。

しかも豆は単価は安いために売っても売り上げは雀の涙クラスだ。

だが幸いにも豆は基本的に“大豆”であった……

ハルケギニアではこのことを知る者は少ないだろうが

大豆は“畑の肉”の異名をとるほど栄養価が高い……

まあ豆自体元々栄養価は高いのだが……

これが何を意味するかは簡単である……

つまり軍の食事に回すにはもってこいなのである……エネルギー源
としてはともかく栄養的な面で……

兵士からは文句を言われるだろうが……

かの大日本帝国海軍の名参謀秋山真之も炒り豆をよく食っていた…

それにあやかるのではないが……栄養の補給に関してはかなり利点がある……

それにジャガイモのフリードリヒ大王よろしく実演でもなんやらやればなんとかなるだろう…

“ 武士は食わねど高楊枝 ” なんてことじゃねえが人間食わなきゃ生きていけないのだ……

あんまり嵩張^{かさば}らないから携帯食にもなるしな……

軍の食糧事情がこれである程度解決した……と思うしかしまだ産業にはなっていない…

だからといってそれから醤油等を作っても現代の欧米らへんを中心として発生したいわゆる“日本食ブーム”のようにこのハルケギニアで受け入れられる可能性は少ない……

またハルケギニアの大豆（？）の種類があちらの世界と同じとも限らない……

一応産業開発予算として経理から予算を少しずつだが計上し研究させてはいる……

豆から酒が作れば困らない……だが第三のビールのようなものを作るほどの科学技術もハルケギニアじゃあり得ない……

ただでさえ科学レベルが中世ヨーロッパとかどんだけ進み遅いんだよ……

約6000年もあってだぞ？

前世の歴史もそうだったが度が過ぎた宗教とかはいかんせん産業の発達を妨げやすい……つーか壁になる。

カルヴァン派が出る前のキリスト教とかキリスト教とかキリスト教とか……

こつちの世界で産業革命やったら異端審問でもされんのかな？産業革命が原因でホントの“革命”が起こつちまったら貴族連中の既得権益が消えるからやられるのは間違いないな……

ブリミルとその弟子の野郎（？）……余計な真似しやがって……って今あの世のどこをさ迷ってるとも知れない野郎（？）を憎んでも始まらない……

またそのような酒には聞き覚えがない……

なので現在食品加工の研究の一環としてハルケギニア版醤油もどき

(?)
の試作品を醸造させてはいる

食品加工の技術や細菌学の土台にもなるしいつか役に立つときが来るだろう…

というのが俺の個人的な見解だ…

産業といえばもう二つ……

一 応 織田信長の楽市楽座を手本として商工業をターゲットとした税制の免除を行った……

あと二つ目は畜産業のテコ入れだ……

ウチの領地じゃ養豚業と乳牛と肉牛の酪農が行われている……今、それに少しずつ手をつけているところだ……

以上がこの二年間で俺達が行ったことだ……

時間の6割くらいが軍の再編に持っていかれてしまったのは誤算だった……

最近領内……それもゲルマニアとの国境付近で不穏な動きがある……

…

不穏な動きといっても山賊と盗賊、オークなのだが……

オークとは豚の頭に人間の体を持つ巨大な亜人の一種だ。体は巨大で知能は低いが凶悪な力を持ち洞窟等に巣を作り悪臭を放ち狩った

動物の毛皮で服を作って着用している

最悪村を襲い畑を荒らしたり人間の子供を食ったりする色々と厄介なロリコン） 意味合いは多少異なるが……？）モンスターである

……

なんでもオーク1匹〓戦士5人ぐらいという変な方程式が成り立っているらしい

王軍の討伐対象にもなってる奴らだ

一応騎士団と歩兵部隊を派遣して討伐してはいるのだが……俺が討伐隊長長で……まあ体面つてのものもあるのよ……

この二年間…実に相当な数のオークや盗賊、山賊達をを捕えたり殺

したりしたものだ……

『うーむ……どうしたものかな……まさか……な……』

「どうしたのですディエル殿？頭など抱えて……皆集まっていますぞ」

カイリさんからそう言われた。

「ン？……ああ……すまないなカイリ隊長……えー緊急の召集でありながら皆よく集まってくれた……感謝します。……それでは領内緊急報告連絡会議を始めます。よろしく願います。まずはリラン内務長官とアイシル財務長官より報告をお願いします」

今日俺は自分の執務室を領内の会議室として利用している。

「わかりました……えー、今日現在までに報告された被害は25件で内訳は盗賊及び山賊の被害は18件、オークの被害は7件です。また被害対象は盗賊及び山賊は商人、オークは各農村のみとターゲット

ットが完全に分離されています。」

「被害額は…目算ですが少なくとも数十万から百万エキューは軽いかと…」

赤い髪に黒縁の眼鏡をかけた男性と茶髪のツインテールの女性の2人が立ち上がりそう言った。

男性の名前はイエルラント・リラン

2年前に昇進した文官の一人でその中でも抜きん出た事務能力を持ち領内の内務長官になった男だ。

女性の名前はキサラ・アイシル

彼女もまた2年前に昇進した文官の一人である。

その財務能力は無論のことだが“石橋を腰にゴム製の命綱と背中にパラシュートをつけて渡る”程の用心深さと完璧主義者もかくやの報告書の緻密さから新たに財務長官になった女性だ…

『リラン長官、アイシル長官、ご苦労様…：今年の税制と処置については追って連絡します…』

次はヴィッツ騎士団長、カイリ歩兵隊総隊長から報告をして下さい。

『

「了解しました…：まずは山賊の件ですがメイジはなく全員が平民でした。しかし戦い慣れたものが多かったことからどこかで雇われた傭兵の可能性がります。盗賊も同様でした…：…」

「オークも操られたというか連れてこられた感じがありました。その腹いせに農村を襲ったかと…：誰かの策略であるのは明白です。」
2人の報告は軍人からみた被害の見解だ。

『となるとアルビオンのテューダー朝かゲルマニアだな…』

アルビオンは地理的にも無理だからあり得ない……何よりこんな小さくて彼らから遠い領地に介入する理由がないからな……

ゲルマニアのアルトブレヒト三世は王宮に同盟の締結を迫ってるが……

だがそれは“表立って”だけであってゲルマニアの手引きの可能性は完全には否定できないな…

それにここは国境付近で土地も肥えているからな…介入の理由もある……』

大量の傭兵を山賊にしたり凶悪なモンスターであるオークを利用するととなると相当な財力を持っているやつがバックにいる可能性が高い……

どこの領主……いや……国家の暗躍の可能性も捨てきない……

「しかしガリアやロマリアはどうするのですか？」

『確かにガリアは厄介だな……兄弟間の継承権争いは兄のジョゼフ一世が即位してから国内は安定している…ハルケギニア最大の国家だしな…だが理由がわからない……』

確かに私はロマリアからは恨まれてるかもしれないけども教皇のクソ爺イの体調が優れないみたいだから介入してる暇はないだろう…』

ガリアとはトリスティンの南に位置するハルケギニア最大の人口1500万人を誇る巨大国家のことだ。

正式名称はガリア王国

近年……先代の国王の死後を兄のジョゼフ、弟のシャルル兄弟の誰が継ぐかで争いが起きていた。

弟のシャルルが突然死したことによってそれは終結したが……

ジョゼフによる暗殺などその死因は諸説あり明らかではない……

兄のジョゼフ一世は魔法が使えず“無能王”と揶揄されている。

だからといって反ジョゼフ派が反抗戦をするというようなことはない。

彼らには反抗戦を行う大義名分となる大将がないのだ……

ロマリアとはガリアの南にある都市連合国家だ……

正式名称はロマリア連合皇国

ロマリアにはハルケギニア全体に浸透している「ブリミル教」という宗教のボス……つまりは教皇がいる。

まあ簡単に言えばロマリアはローマのバチカン市国の拡大バージョン in ハルケギニアである。

何分行ったことがないので教皇の住まいがサンピエトロ大聖堂みたいなところがあるかはわからない……

だからといって行くつもりは毛頭もないがな

まあ……いくらハルケギニア全体がヨーロッパに似ているといってもそこまでそっくりではないだろうが……

またロマリアがハルケギニアのバチカン市国ならば……

ブリミル教はキリスト教のハルケギニアバージョンみたいなものである……

当然ブリミル教の中のイエス的な存在は「始祖」ブリミル

なんでもブリミルは「聖地」をエルフに追われてこのハルケギニアに来たんだとか……

そのためブリミル教ではエルフを毛嫌い……というよりはそれを越えて完全に“悪魔”呼ばわりしている

キリスト教での「神殺しの民族」ユダヤ人と同じ扱い……いやそれ以上に酷い扱いだろう……

さらに言えばプリミル教は中世ヨーロッパのキリスト教の教会並に暴走してると言っても過言ではないだろう…

教皇が管理する教皇庁は異端者的な存在や行為をしたものには中世ヨーロッパ時代のどっかの国みたいに異端審問なるものを行っている。

さらにはプリミル教から派生したっぽい宗教…所謂新教徒を弾圧しているとか……

光の国などというような呼び名があるが所詮それは表面上だけ……

実際は神官が平民を搾取するという構図がありトリスティンとなんら変わりはないだろう

また司祭や神官の腐敗がかなり進んでいるがかのルターが行ったような宗教革命はまだ起きちゃいない……

いい例が二年間前に追放したクソ神官と司祭どもだ……………

その件のせいかな俺はロマリアとは仲が悪い……………

ウチの領内はハルケギニアじゃブリミル教への信仰はかなり(?)
薄い方だ……………

俺に至っては信仰の「し」の字の「S」すらもないのだがな……………

俺は仏教徒だ……………こっちなや経典あっても仏像がないけど……………

あとトリステインの隣国ゲルマニアもかなりブリミル教の信仰は薄い。

あと何故ゲルマニアがハルケギニアでは野蛮な国家と言われるのかには確固たる理由があるみたいだ……………

それが「ブリミルの血統」だ……………

トリスティンとアルビオン、ガリアの三国は王国を名乗っているのはある理由がある。

彼ら国王の血統、家系図を遙か昔、6000年前まで遡るとブリミルに辿り着くからだ……………

つまり各王国の国王は全員ブリミルの何百…いや何千世代目の子供なのだ。

ロマリアの建国者……………つまりのこの初代教皇はブリミルの弟子にあたる存在だ。

以上の国家に対してゲルマニア皇帝にはブリミルの血が混じっている

ない

なので他の国家からは格下に見られている。

だからといってトリステインの貴族連中が領土や国力がトリステインの何倍ものゲルマニアを格下に見るのはいかなものかと思うがな……

205

国力だけ見ればゲルマニアは十分に大国と言えるだろう…

だがトリステインの貴族連中はそれを認めようとはしない…

トリステインの貴族はいかんせん伝統を重んじ過ぎていてプライドと自尊心がエベレストの如く高い。

こう言っちゃ悪いがプライドと自尊心“だけ”は一人前である。

親父や母さんはその完全なる例外だが…

下手をすればゲルマニアに滅ぼされるなんてこともまったくあり得ない話ではない……

まったく…上…王宮の連中には危機管理能力的なものはないのだろうか？

それともただの阿呆なのか？

まあ………国境地帯の一領主が国の事なんざ考えても時間の無駄である………

さて、話を会議に戻そう。

『うむ………どうしたものかな………一番可能性が高いのはゲルマニア………でも帝国軍の可能性は低い………考えられるのは諸侯軍だけどフオン・ツエルプストー辺境伯家はまずあり得ないな………』

フオン・ツエルプストー伯爵家とはゲルマニアの優秀な軍人の家系である。

ド・フリーン領のお隣さんラ・ヴァリエール公爵家とは何代もの宿敵関係………

つまりは世に言う“不倶戴天の敵同士”って関係だ………殺しあった両家の人間の数は計り知れない………さら言えばヴァリエール家はツエ

ルプストー家に何度か婚約者^{フィアンセ}を奪われたとかないとか…

ヴァリエール公爵家は抑止力になっているからあり得ないし狙うならヴァリエール公爵の領土を狙う筈だ…

フォン・ツェルプストー家もこんな領地に手を出すほどバカでも戦好きでもないだろう……

俺は手の中にある羽ペンを回す。

……
学生時代に戻ったみたいだ……雑念が抜け指先に神経が集中する……

カーン……カーン……カーン

心なしか鐘の音が聞こえる……

幻聴か？………

ソワッ……

俺は一瞬だけ背中に寒気を感じた……

何だ？この背筋が凍るような……嫌な感じは………？

フォン・ツェルプストー……ゲルマニア……国境地帯……誰かの仕業
………傭兵………

様々な単語が俺の脳内でくつつきあった……………

まさか……………

……………マズイ!!

バンツ!!

『グイツツ団長とカイリ隊長はすぐに騎士団と領軍全部隊を召集し演習場に集結させる!! リラン長官はヴァリエール公爵と王室に早馬の準備だ!! 急げ!!』

俺は机を叩きそう怒鳴った。

「い……一体どうしたんですかディエル様!？」

ヴィッツ団長が俺の反応に驚き聞き返した時……

バアンとドアが勢いよく開かれた……

「申し上げます!!ゲルマニア軍約20000が国境を越え我が領土東に侵入!!物見によると軍団長はヴァレーノ子爵だそうです!」

会議室に衝撃が走る……

「東からか……御苦労……ヴィッツ団長、カイリ隊長は領軍全部隊を実践武装で召集して集結させて下さい。リラン長官は早馬の手配を……君とアイシル長官は土木防衛部隊に武装と召集の連絡をしてくれ……」

…』

「了解しましたー!」「」

彼らはすぐに退出していった。

チツ…迂闊だった…フォン・ツエルプストー家にはかり目線がいつてヴァレーノ子爵家の存在を忘れていた…

奴も一応ゲルマニアの国境地帯の貴族だ…アルトブレヒト三世の即位から少しずつ没落してきている軍人と文官の家系だとは聞いているが…

『進軍の方角とスピード、数から見て戦闘エリアはここか…こここの地図はっ』

俺は執務室の本棚からある一冊のファイルを取り出し、そして手紙を書き始めた。

手紙はお隣さんのヴァリエール公爵と王都にあるトリスティンの王室に宛てた手紙である。

両方とも内容は言うまでもなく今回のゲルマニア諸侯軍の進軍と迎撃の報告ならびに援軍の要請である。

もっとも王軍の連中の援軍は最初から期待していない………というよりは援軍を寄越さない可能性が“限り無く”高いからだ………

王室の連中は間違いなく援軍に反対するか様子見をするだろう………

奴らにとって俺達のような成り上がりで貴族平民問わず登用したりするゲルマニア的な思想の貴族ははっきり言って“邪魔者”だから………

まあ勲章目当ての連中は俺達を咬ませ犬にしてから援軍を寄越すだろうがな……

寧ろ他力本願と思われるだろうがヴァリエール公爵からの援軍は是非とも欲しい……いや………来ないと困るのだ……

色々……大真面目な話………戦略的にも戦後処理的にも………

「ディエル様……早馬の準備が整いました」

リラン長官が鎧を来て戻ってきた。

『リラン長官御苦勞…ではこちらを王都に、こちらをヴァリエール公爵に頼む…ヴァリエール公爵には君が数名の護衛を連れて行ってくれ…君にヴァリエール公爵との交渉役を頼みたい』

「了解しました！」

リラン長官は再び部屋を退出していった。

ふう…まさか14歳で初陣だとはな……

いや…討伐任務やなんやらを入れるならば26回目だな…

俺は指揮官の鎧を着て武装の確認をしている。

今の俺の武装はこうだ

ルシファー

左腰に帯刀

木製の小杖（契約済み＋《硬化》重ねかけ）×2

胴回りのポーチ

暗器、アーミーナイフ×2ずつ（《固定化》《硬化》重ねかけ）

胴回りのポーチ

ゲイボルグ（杖）（《固定化》《硬化》超重ねかけ）

左腰

青龍堰月刀（刀状態）（《固定化》《硬化》超重ねがけ）

背中に帯刀

防具

鎧（《固定化》《硬化》超重ねがけ）

アンダースーツ（簡略化防弾仕様）

となっている

このアンダースーツの防弾仕様はカイリさん達の軍服を参考にして
作った領軍の全部隊全兵共通の防具だ

無論……俺達の領軍のみで採用されている。

太陽が眩しい……まだ空は日は高い……ハルケギニアの現在は日本で例
えるならば春だ……

ザワザワ……

ここはヴィングレード郊外にある領軍の演習場だ

春のそよ風が駆け巡り運ばれてきた芝生の匂いが鼻腔を撩る。

今現在ここには領軍全騎士団、部隊総勢950全員が集まっている。

S I D E O U T

鎧とマントに身を包み青龍堰月刀を持ちながらディエルが演習場にやってきた。全員戦闘用の武装になっている…

『領軍の戦士諸君…聞いてくれ!!』

今現在我々の領土に約2000のゲルマニア諸侯軍が東より国境を越えて進軍してきた!!

報告によれば幾つもの村が被害を受けている…私はこれを許してはおけない！

この3年間……皆各々が日々努力を重ねてきた筈だ……

農民も商人も…我々領軍も！！

だが…その努力はゲルマニア諸侯軍によって情けなく踏みにじられた……

今こそ我々領軍の本義を見せる時である！

何故領軍があるのか………国の戦争の先峰となるためか？…否！

領軍とは領土の安全と領民を守るために存在するのだ…!!

今こそ……我々が一丸となり侵略者から我らが母なる大地を奪還し

……

この土地の平和を取り戻すのだ!!

私は今……ここに誓おう!!

I shall return !!

私はこの戦いの後に必ずここに帰って来ると!!

戦士たちよ!今一度私に力を貸してくれ!!」

彼は青龍堰月刀を空に高く掲げてそう叫んだ。

そして一瞬の静寂が流れ……大地の全てを震わすような騎士や兵士達の雄叫びが響き渡った。

彼はこの3年間を領地経営と鍛練に捧げてきた。

腐敗による汚職を一掃し実力のある者は身分問わず登用し、領民のために働いていた。

夜遅く誰もいない修練場や演習場、屋敷の庭にて剣を槍等を振り鍛練に明け暮れた。

屋敷の地下倉庫の書物にも手をつけていった。

兵法、兵学、哲学、道德……あらゆるものを学ぼうとしていた。

その努力は領軍の兵士やメイジ、騎士団の誰もがよく知っている。

彼は14歳で最下級の“ドット”メイジでありながら騎士団を率いれる程の実力を誇っている。

そんな彼だからこそ領軍や領民は彼に信頼を寄せていた。

その後彼らは隊列を整えヴィングレード演習場から出撃した。

1日後の朝……彼らはレマイルという東西に細長い平原に来ていた。

平原といっても西……ヴィングラードの方にかけて緩やかに狭くなり丘ともなっている。

西風がよく吹く美しい草原として地元では有名である……

平原と丘との高低差は約286マイル

ド・フリーン領軍はこの丘に昨晚から陣を張っていた。

左翼をボブ・ライランス隊長率いる第1砲撃部隊、その前にラン・ナーリング隊長率いる突撃歩兵部隊

右翼をエドワード・ヴィッター隊長率いる第2砲撃部隊、その前にケン・リッカー隊長率いる遊撃歩兵部隊

中央には軍団長ディエルとカイリ・グレー歩兵隊総隊長の部隊とエドワード・ヴィッツ団長率いるド・フリーン騎士団、その後には土木部隊

のような配置でド・フリーン領軍が展開していた。

一方その頃ヴァレーノ子爵率いる傭兵を含めたゲルマニア諸侯軍2000はレマイルまであと約数十リーグのところまで来ていた。

「フフ…容易いものだな…おい…あと何リーグでヴィングレードととかいう町に着く？」

自分の馬に乗り顎髭を撫でながら小太りのファッションセンスの欠片もないような派手な服を着た男が副官に尋ねた。

「はっ！あと約200リーグ程…約1日程の時間があれば到着できるかと思われませんが…まだ敵領軍は見当たりません……」

次はレマイルとかいう平原に差し掛かりますが…閣下………いかがいたしますか？」

「どうせ逃げたしたのだろう？たとえ軍を率いて来たとしても14歳の領主など赤子にすぎぬ…このまま進軍するぞ……」

「了解しました……」

彼らはそのまま進軍し、レマイルに進んでいった。

場所は変わりここはラ・ヴァリエール公爵の屋敷…

時間は遡ること20数時間前……

S I D E ラ・ヴァリエール公爵

今日は珍客が来た……

夕食が終わった直後にド・フリーン家…つまりはディエルからの早

馬が来たのだ……

こんな時間に早馬など……あやつは一体何を考えているのだ？

「私はド・フリーン家領内務長官のイエルラント・リランと申します……我が領主ディエル・メディナクー・ド・フリーン様より閣下宛の書状を預かっております。お読み下さい。」

火急な用事だとかで執務室にてカリーヌと共に話を聞いている……

「な………ゲルマニア諸侯軍がド・フリーン家の領地に侵攻しただと!?」

「あなた……どうしましょ……」

ゲルマニア軍が侵攻してくるとは……まさかツエルプストーか？

「いえ、侵攻したゲルマニア諸侯軍はフォン・ツエルプストー家ではなく

ヴァレーノ子爵が軍団長のようです……王室にも同様の書状は回しておりますがディエル様は「王室よりも閣下の方が何倍も重要だ」と仰っております。」

リランとかいう男はそう言った。

おいおい……あやつは本当に14の子供なのか？

手紙と共に数枚の紙が同封されていた……

それには手紙の続きと敵軍との予想戦闘地域の測量図が同封されていた。

まさかあやつ… “最初から” 王室の雀どもをあてにしていなかったのか？

確かに両親が王室からの嫌われ者であったから息子も嫌われる可能性は高い……………

それをわかった上で私に手紙を寄越したのだろう…

さらに手紙の内容が内容だ…

まさか………… あやつどこかの詐欺師にでも弟子入りしたのではあるまいな？

「わかった…軍を向かわすから案内を頼む…」

「了解しました！ありがとうございます、閣下…」

その男はやけに喜びに満ち溢れた顔をしていた…

「リラン殿…聞くが…何故そこまで喜ぶのだ？」

「私は…3年前まで下級貴族の下級役人で平民同然でした…しかし
ディエル様に登用していただき、今こうしてこのような任をいただき
くまでにしてくださいました。あの御方の任を果たせたことが嬉し
いのです…」

実力があれば下級貴族、平民であろうと登用するか…あいつも領主らしくなったものだ…

S I D E O U T

時間と場所は戻りレマイルの朝…

今、侵略者を追い払わんとするド・フリーン領軍と領地を手に入れんとするヴァレーノ子爵軍の戦いが始まるうとしていた。

“レマイル平原”

そこは今はまだ知る者少なき美しくも小さな草原であるが……

この戦いを皮切りとしてハルケギニアの歴史にひょっこりと名を出す地名となるとは……

“今”は……

誰も知らない……

「全軍っ…突撃い！」

ヴァレーノ子爵の号令でゲルマニア諸侯軍が動き始めた。

騎士団とメイジ部隊を穂先にした槍型の陣形による突撃

ただか900…自軍の半分にも満たない敵軍などすぐに倒せる……

と西風の吹くなかヴァレーノ子爵は馬上で顎髭を撫でながらそう高

をくくつていた。

しかしその考えは戦闘が開始した直後に打ち碎かれることとなった

……

ヒュウン… ヒュウン…

矢が空を切り裂く甲高い音が一瞬…彼の耳にも微かに聞こえた

ドオン…ドオン…ドオン

大砲の砲撃の音が聞こえる……

風、火の系統魔法が来るのがわかる。

戦場となった草原に突如雨が………現れた

それは普通ではあり得ない色をした巨大な雹を含んだ雨……

騎士団とメイジ……傭兵がそれによってまた一人……また一人と倒れて
いった。

魔法はともかく何故矢や砲弾が届くのか……

何故騎士団やメイジを倒せるのか……

彼…ヴァレーノ子爵にはわからなかった。

確かに騎士団やメイジのいた辺りは弓や大砲の射程距離からは少しばかり遠く……本来ならば届きはしない

だが‘本来’は‘本来’なのだ…

“今”は違う…では何故届くのか？

理由は至極簡単にして単純明快だ……レマイルの平原に吹く西風である。

西風が矢を砲弾を推す形に吹いているために飛距離が本来よりも加算されているのだ…

だからといってそれだけでは当たらないし正確に狙撃、砲撃は出来ない…

その点を砲撃の錬度が補っている…

ハルケギニアの陸軍では砲隊は重要視されていない…

またトリステインもその例に漏れない…

だがそれは王軍での話…ド・フリーン領軍の砲撃部隊は違う…

3年前に行われた軍の再編から今日まで…大砲を領軍独自に何回も改良し、何百回にも及ぶであろう訓練の回数とその内容が今の砲撃を支えている……

大砲の独自の改良にはボブやエドワード達アメリカ軍の人間や屋敷の地下倉庫の書物の存在が大きい……

魔法も弓矢も同様にナイフ並みに修練し、努力を重ねてきている。

所詮は平民の武器……

そう貴族が侮る武器は度重なる努力によりこの戦場では立派な脅威と化していた。

所変わってここはド・フリーン領軍の陣地

『よし…そろそろ出番だな…これより私と騎士団を先頭にして中央に突撃する！全砲撃部隊は左右に狙いを変更！メイジ部隊は緩やかに前進しつつ騎士団の援護射撃を！！歩兵、土木部隊は弓を撃ち終えたら緩やかに前進しろ！行くぞ……………セキト……………我に続けエ！』

彼はそう指示を出し、愛馬に一言そう言った。セキトは主の呼び掛けに「やっと俺の出番かよー！！」
と言いたげな程に鼻息を荒くして返し、戦場に向かって勢いよく走りだした。

なんなんだこいつらは…………

本当にこんな小さな領地の領軍なのか？

ヴァレーノはそう戦場を見て感じた……

ヤツは…所詮は14歳の貧弱なガキが大將の弱小な軍隊だと……

これのどこを見たらこの軍隊が弱小に…大將が貧弱に見えるのだ……

ド・フリーン騎士団は鬼もかくやの勇猛果敢さで戦場を駆け巡り敵軍を押しまくった。

だがその中でも一際異彩を放つ騎士がいた…大將のディエル・メデ

イナクー・ド・フリーンである。

彼は愛刀である青龍堰月刀を振り回し血のように紅く炎のような鬣
を持つ馬で戦場を駆けた……………

時折刀を紅い長槍：ゲイ・ボルグに持ち変えながら鬼神の如く暴れ
まわった。

一振りすれば数人の自軍の兵士の鮮血と命が散る……………

というような敵軍からすれば悪夢の如き、味方としては闘志を鼓舞
する光景…

武器と大地を利用した《錬金》を駆使してまた一人と騎士やメイジ
達を討ち取っていった。

彼の服は遠くからでもわかる程の返り血に染まっていた…

砲弾と矢の雨が少しおさまった…

しかし敵のメイジ、歩兵部隊がこちらを包囲するようになり前進してくる…

勿論歩兵とメイジの部隊は自軍のメイジや傭兵と衝突し、戦闘になる…

だが自軍のメイジと傭兵を押しまくっていた。

あり得ない…メイジ殺しじゃあるまいし…

とそう考えている内にも先鋒を打ち砕いた紅蓮の馬を戦闘として敵の騎士団が突っ込んでくる。

「く…クソツ…ガキの癖に…平民上がりの癖に…！」

ヴァレーノはそう言って馬に鞭を打ち撤退を始めた。

敵が撤退を始めたのを確認してディエルは微かにほくそ笑んだ。

ヴァレーノ子爵とその部下達はレマイルの東に抜けようとしていた。

『敵は退き始めた！追撃しろ！！敵将を捕えるんだ！！……』

ヴァレーノ子爵さんよ……残念だがそつちにや“俺よりも”遙かに恐ろしくて強い人がいるんでね……』

ディエルはそう追撃の指示を出した。

しかし彼の後半の言葉は近くにいたヴィッツやトレング、ヴァステイにしか聞こえなかった。

「成る程……だから手紙を王室以外にも回していたのか……いつもながら……本当に14歳の子供なのか？」

ヴィッツは馬上で杖を振りながら色んな意味合いで背中が寒くなってきた。

「クソッ……なんなんだ…なんなんだアイツらはッ!！」

ヴァレーノは部下と共に母国ゲルマニアへと撤退しながらそう叫んだ。

彼らの後ろからはまた…あの紅い馬が近づいてくる…

その馬の疾風の如き速さ…

少しずつではあるが……

しかし着実にその馬との距離は縮まっていく……

まだ逃げられる……彼は背中に自分たちを捕え……その命を刈り取らんとする死神の群れから逃げながらそう思った……

ド・フリーリン領は確かにゲルマニアとトリステインとの国境付近にある地域だ。

つまり彼らにはゲルマニアに逃げ込む確率はまだ残っていた……

そう……

彼らにはまだ一縷いづいの希望は残っていた……

……とある人物が彼らの前に現れるまでは……

「そこまでだな……………ヴァレーノ子爵殿……………」

彼らの目の前に歳は50を越えているであろう…白髪混じりのブロードを持つ男が軍を率いて現れた…その隣には赤いショートカットの髪に黒縁の眼鏡をかけた青年がいた…

ヴァリエール公爵とイエラント・リランである。

「な、なな……………な何者だ貴様らア……………!!」

「私はド・フリーン領の隣にあるラ・ヴァリエール公爵領の当主だ……………ド・フリーン領主ディエル・メディナクー・ド・フリーンからの要請により貴様を捕えさせて貰おう…」

「ふ…ふざけるな!!早くこの爺を叩き潰せ!!あのクソガキに捕

まっただまるかー!!」

「閣下…私もやって構いませんよね？」

数分後……

ヴァレーノ子爵は馬を引き換えして逃げていた……

自分の副官達は悉く捕まっていた。

運良く逃れたのはヴァレーノを含めたわずか数名のみ……

「閣下…追わなくてよいのですか？」

「構わぬ…向こうにはディエルが回っているしな…それにしても
リラン殿…お主…本当に文官か？他の護衛も中々の強さだ…」

「はい…一応文官でも一通りの訓練は受けていますから…彼らは
領軍の兵士ですから…訓練が厳しくて厳しくて…」

250

「そうか…やはり親子は似るものだな…我々も行くぞ…」

「はっ」

リランとラ・ヴァリエール公爵は再びヴァレーノを追いかけ始めた。

「ハアツ…ハアツ…ハアツ…………クソツ…………グワツ!？」

ヴァレーノは逃げていたが突如馬から叩き落とされた。

『ヴァレーノ…貴様をド・フリーン領軍軍団長ディエル・メディナ
クー・ド・フリーンの名のもとに捕え捕虜とさせて貰おう……………』
『ア
ースハンド』……………』
『《錬金》 《錬金》 ……………』

ヴァレーノはアースハンドと錬金された鉄により拘束された…

こうして一部に「レマイルの戦い」と言われる紛争がここに終結した。

王都訪問

S I D E O U T

戦いは終結した…

現在ド・フリーン領軍はラ・ヴァリエール公爵の率いてきた軍と対面している。

周りには捕えられて捕虜となったヴァレーノ子爵を筆頭とする敵将達が手錠と猿轡をはめられている。

猿轡はディエルが《鍊金》して嵌めた物であるが……

彼には男色の趣味も……こういった趣味もないことを言うておこつ
……

『閣下……突然の無礼な援軍の要請を受けていただきありがとうございます。』

「構わぬ……しかしよく統率された領軍だな……中々できるものではない……此度はお前もよく働いたな……」

ディエルは公爵に頭を下げ感謝の意を述べた。

公爵は隊列を整え事後処理にあたる領軍をみてそう感想を漏らした。

『はい……私はこの3年間実に良い士官と兵士、騎士、文官、民に恵

まれました…

これから我々は王都に敵將を引き渡しに行きたいと存じておりますが……』

「ならば私は行かなくても構わんな…」

『しかし…今回の敵將の捕虜には閣下達が捕えた者が多くおります…我々は半分程度ですが……それに王室のバカ雀から閣下に何かしらの連絡があります……』
公爵の返答にディエルはすぐさまそう返した。

「確かに「何故隣領の軍を助けなかった」と言われてもおかしくはないな……すまない感謝する……敵將は手紙の内容通りに扱うのか？」

『はい……損害賠償と身代金とすれば失敗しても捕虜にもできますゆえ……』

「わかった…では王都トリスタニアに向かおう…」

『ありがとうございます…閣下…』

では……騎士団は指揮権をトレング副団長に移して残党の排除を…

歩兵部隊は指揮権をリックカード隊長に移して土木部隊の援助に回れ、メイジ部隊は騎士団の援護を…

衛生兵は負傷者の手当てを…ヴィッツ団長とカイリ隊長は王都に向かうから共に来てくれ……リラン長官はアイシル長官と協力して損害と被害状況の報告の作成を頼む。』

「了解しました!！」

この後、ヴァリエール公爵とディエル達は王都に向けて馬を走らせた。

そして1日後：現在ここトリスティン王国王都トリスタニアの王宮では文官武官交えた会議が開かれていた。

議題は無論のこと昨日…ド・フリーン領からきた使者によるゲルマニア諸侯軍侵攻についての対応である

「まずはド・フリーン領の領軍に抵抗させてそこに王軍を投入すればいいではないか！」

「いくら『金狼』と『炎華』の息子だろうとまだ14…赤子同然だぞ…！」

「まずはゲルマニアに特使を派遣して様子を見れば…」

「そんなことをしていたらその間に侵略される!」

「ド・フリーン領の隣にはラ・ヴァリエール公爵がいるではないか! 公爵に挟撃してもらえば!」

「そしたらツエルプストー家に隙を突かれて公爵領まで被害が出るぞ!」

その会議の様子を2つの玉座に座る少女と女性が、その隣に立つ一人の痩せた壮年の男が見守っていた。

少女の名はアンリエッタ、

アンリエッタ・ド・トリステイン

この‘トリステインの華’といわれる栗色の髪を持つトリステインの王女である。

女性の名はマリアンヌ

アンリエッタの母親でトリステインの太后をしている。先代国王…アンリエッタの父親である彼女の夫が亡くなってからは喪に伏しており現在トリステインの王位は空白となっている。

男の名前はマザリーニ

トリステインの家臣筆頭でありロマリアから派遣されたブリミル教の枢機卿でもある。

先代国王亡き後のトリステインの政治を取り仕切っている。

その年齢不相应のガリガリな体型から通称‘鳥の骨’と揶揄されている……

会議では文官武官両者が納得する案が出ないまま刻一刻と時は流れていった。

すると…突如部屋のドアが勢いよく開かれ王宮の衛士が息を切らしてやってきた。

「馬鹿者！何をしている！今は会議中だぞ！！」

「構いません…一体どうしたのですか？」

武官の一人が怒声を上げるとマリアンヌが諫めてからその衛士に質問した。

「そ…それが…：ラ・ヴァリエール公爵並びにド・フリーン領主が今回侵攻してきたゲルマニア諸侯軍2000を撃破し、只今その敵将を捕えて城門に参られましたア！！」

「何…：ゲルマニア諸侯軍が破れただと？」

衛士が告げた内容に文官武官共に驚きを隠せなかった。

「すぐに城内に迎え入れろ！すぐにだ！」

「りよ…了解しましたア!!」

マザリーニがそう言うつと衛士は部屋を飛び出して城門に向かっていった。

数分後ディエルとヴァリエール公爵は衛士から呼び出されアンリエッタとマリアンヌに謁見することになった。

S I D E ディエル

城門で足止め食らって待たされた俺と公爵はアンリエッタ王女とマリアンヌ太后から報告を聞きたいとの理由で呼び出された……

王室は豪華絢爛としかいいようのない位だった…

どんだけ豪華なんだよ……仕事し辛くねえのか？

俺と公爵がアンリエッタ姫とマリアンヌ大后の玉座の前に跪いている。後ろにはヴィッツ団長とカイリ隊長も跪いている。

『ド・フリーン領領主ディエル・メディナクー・ド・フリーンにございます。』

此度はアンリエッタ姫殿下並びにマリアンヌ大后殿下に謁見できたこと……私の生涯の誉れにございます……』

あゝ面倒くせー。美辞麗句を並べんのは得意じゃないんだけど…

別にこいつらに会わなくたって生きていけっから構わねえんだが…

「今回の働きは称賛に値します。ヴァリエール公爵と共に王国のためによく働いてくれました……」

『「勿体なき御言葉にございます」』

だったら早めに王軍回して冷戦時代のソ連とかロシアよろしく国境警備しっかりしやがれってんだ…

俺は別にテメエら“国”のために闘うなんて一言も言ってねえっての…

公爵も多分は……違う……

堅物なああの御仁のことだからそれはないか…

「まったく……下手したら攻めこまれてつてのに……全く……危機感ぐらいねえのかよ」

「さてディエル殿、ヴァリエール公爵……捕虜とした敵将の処分はどうするのだ？」白い服を纏った爺さんが質問してきた。

「こいつがあのか、鳥の骨……トリスティンの国政を担っている男……マザリーニ枢機卿か……」

「ニッケネームのようにガリガリじゃん……」

「けど年はそんなに食ってないとか聞いたんだがな……」

『ヴァレーノ子爵を始めとする敵将の身代金とド・フリーン領における損害賠償をゲルマニア帝国に求めます……』

「な…………身代金と損害賠償などゲルマニアが受け入れるわけなからっ！」

「奴らは国を挙げて攻めてきているのだぞ！」

「成り上がりの野蛮人に臆病になったのか！」俺がそう言つと周りの文官武官連中がそう言つてきた。

五月蠅い小太り雀どもだな…………人の話くらい最後まで聞けや…………

「最後まで聞きなさい…………ディエル殿…………それは何故かな？」

お…………意外…………中々話のわかる爺さんなんじゃね？

『私はこの度の戦はゲルマニア帝国によるものではなく一諸侯の暴走による侵攻と考えております。理由はいくつかございます…』

まず始めにゲルマニアが帝政国家でありトリスティンが王政国家である点です…

ゲルマニアがトリスティンに侵攻したならば同じ王権国家のアルピオン、ガリアの介入を引き起こしかねません。そしてそれはゲルマニアを一気に不利な立場に立たせます……』

まあ、あくまでも、ガリアとアルピオンが兵を出してくれたら話だが……

しかし同じブリミルって祖先を持つ王権国家ってことで結び付きやすいのもまた事実である……、あくまでも、可能性だがな……

『二つ目は外交の面であります。』

現在ゲルマニアはトリステインに同盟の締結を迫っているとか…ならば国を挙げての侵攻はないでしょう…

また国を挙げてならば宣戦布告をしなければなりませんし、軍の規模も今回よりも遙かに大きなものであるはずです…

アルトブレヒト3世も阿呆ではありません。もし仮に国を挙げて侵攻したとなればゲルマニアはその後の国際社会で恥をかくことになりましょう。

それはゲルマニアにとっては百害あって一利はない私とは考えています。』

二次大戦時の日本じゃあるまいし…

いや…違うな…あれは外交上の行き違いだからな…

下手したらゲルマニアの商業全てにも影響が出かねない……………

「裏切りのゲルマニアと商売なんかしてられるか！」ってみたいにな……………

『三つ目はゲルマニアの国家体制にあります。貴族が利害関係で結合し生まれた国にございます…それ故に野心ある貴族が皇帝の命を無視して勝手な行動をしたとしても何ら不思議はありません。それと今、何処の誰かが「成り上がりの野蛮人どもに臆病になった」と言われましたが…』

おそれながら……………私はゲルマニアという国を野蛮人だの成り上がりだのと言つのは止した方がよろしいかと存じます……………』

「ほう……………それは何故かな？」

マザリーニが食いついてきた。

『ゲルマニアはトリステインの約10倍の領地を所有しております。またその軍事、科学力を嘗めてはなりません。またその実力主義なる風潮は良き人材を生むには優れたシステムでもあります。』

僭越ながら私はこの3年間で領地とは‘人’であると考えております。さすれば此度の戦勝ちはいたしましたでしたがゲルマニアの力は侮れませぬ。驕りは敗北を招きます。

未熟で若輩者の私めの戯れ言により姫殿下、大后殿下のお耳を濁しましたことお許しいただきたく存じます……』

あーなんか何気になりに喋っちまったな……しかも柄にもないことをベラベラと……“今後”の忠告と受け取って貰えりゃこちとら万々歳だ……

けれども俺が一番言いたかったのは「こんなたかだが14歳のガキに考えさせてるお暇があるんなら下らない権力闘争やなんややってふんぞり返ってねえで真面目に働きやがれ!!」ってことだ……

「ふうむ…中々興味深い意見が聞けた。」

マザリーニの爺が細い顎を掴み俺を見ながらそう言った。

その後俺達は退出を命じられた。

退出をした後にヴァリエール公爵は用事があるとかで先に帰っちまったが俺達も領地に帰ることになった。

本来ならば俺達には被害者代表兼当事者として残って交渉の場に立つ必要があるはずのだが……………

案の定マザリーニの爺に「外交は我々に任せなさい」的なことを言われたのであえなく撤退ということとなった。

確かに俺は外交の交渉なんてさっぱりわからん。確か…餅は餅屋、鍛冶は鍛冶屋’ってみたいな諺あったよな？その道のプロ（仮）に任せた方が確かに上手くいきそうでもあるしな……

その代わりに後日…リラン長官とアイシル長官からの報告を元とした身代金と損害賠償の請求額を書いた手紙を送ってやった。

だいたい600万〜800万エキユーくらい請求してやった。

合計した請求額って言うっても実際はウチの農産物の利益と各農村への補償額、今回の戦闘でかかった軍事費や負傷者の医療費、遺族への補償金やなんやらを含めた損害賠償が7割以上なんだが……

まあ正直なところこんくらいは働いてくれなきゃ此方としても困る……

先の迎撃作戦でかなり砲弾使ったり…被害のあった村に炊き出しさせたり土木部隊に整備させたりでかなりの金がかかった……

こちらら敵さんみたいに傭兵を雇ってる暇がなかったからまだ出費が嵩張らなかつたからな……

少しは感謝くらいしてくれや…

マジで二次大戦下で国債発行しまくった国の気持ちがわかるわ……

戦争って真面目に数年分の予算が一瞬でぶっ飛ぶのな……… 比喩無しで………

平和の観点からも経済的な観点からも戦争はしたくはないものだ………

と俺は今回の戦争で身をもって実感し……

そついやマザリーニの爺……なんで最後らへん汗かいてたんだ？

あの部屋あんまり暑かねえし今は日本の3月くらいのテイルルの月の第三週のエオロー週の木曜日のイング曜日だぞ？

春真つ盛り……よほどの汗つかきかあの場がよほどの修羅場じゃなきや汗かねえぞ？

あー言い辛い……日本のカレンダーがこんなに楽だとは思わなかったぜ畜生……

私は目の前に広がる不毛な会議を眺めていた。

すると一人の衛士がドアを開きゼエゼエと息を切らしながらやってきた。

現在城門付近はゲルマニア侵攻の報以後……敵戒態勢を取らせていた。

「そ……それが……ラ・ヴァリエール公爵及びド・フリーン領主が侵攻してきたゲルマニア諸侯軍2000を撃破し、只今その敵將を捕えて城門に参られましたア!!」

「何……ゲルマニア諸侯軍が破れただと？」

衛士が告げた内容に文官武官は驚きを隠せなかった。

それもそうだろう……ゲルマニアの諸侯軍2000を僅か14歳の子供の領主が率いた軍が打ち破ったのだから……

「すぐに城内に迎え入れろ！すぐにだ！」

「りよ……了解しましたア！！」

私がそう命令するとその衛士は部屋を飛び出して城門に向かっていった。

彼らを迎えに……

そして数分後……彼らはやってきた。

彼とラ・ヴァリエール公爵がアンリエッタ姫殿下とマリアンヌ太后殿下の玉座の前に跪いている。後ろには彼らの騎士と参謀らしき者達も共に跪いている。

『ド・フリーン領領主ディエル・メディナクー・ド・フリーンにございます。』

此度はアンリエッタ姫殿下並びにマリアンヌ太后に謁見できたこと…私の生涯の誉れにございます。』

彼は恭しく頭を下げてそう言った。

「今回の働きは称賛に値します。ヴァリエール公爵と共に王国のためによく働いてくれました……」

『「勿体なき御言葉にございます」』

大后からの御言葉に彼らはそう返す。しかし少年の黒目には少しばかり呆れと怒りの色が見えた。

王軍を回さなかったことに対してなのだろうか……

「さてディエル殿、ヴァリエール公爵…捕虜とした敵将の処分はどうするのだ？」

私がそう質問するとその少年が口を開いた。

『ヴァレーノ子爵を始めとする敵将の身代金とド・フリーン領の損

害賠償をゲルマニア帝国に求めます……』

「な……身代金と損害賠償などゲルマニアが受け入れるわけなから……」

「奴らは国を挙げて攻めているのだぞ！」

「成り上がりの野蛮人どもに臆病になったのか！」

彼の発言に周りの文官武官は一斉にそう叫ぶ……

面白い意見だな……外交の交渉にて決着をつけようというのか……

普通ならば反撃をして全面戦争に発展させようとするのに……

「最後まで聞きなさい…ディエル殿…それは何故かな？」

私はそれを止めて彼に問うた。

両親‘金狼’と‘炎華’が死んでから3年…

家督を継いでロマリアの司祭と神官や文官、徴税官の一斉処分、さらには減税をして今までにはない領地経営をし、今度はゲルマニアの一諸侯軍とはいえそれをヴァリエール公爵との連携にて打ち破った少年に興味を抱いたからだ…

さらには堅物と言われるあのラ・ヴァリエール公爵にもすぐさま援軍を出させた……

その内に何を秘めているのか…探りたくなつた。

『私はこの度の戦はゲルマニア帝国によるものではなく一諸侯の暴走による侵攻と考えております。理由はいくつかございます…』

まず始めにゲルマニアが帝政国家でありトリステインが王政国家である点です。

ゲルマニアがトリステインに侵攻したならば同じ王権国家のアルビオン、ガリアの介入を引き起こしかねません。

そしてそれはゲルマニアを一気に不利な立場に立たせます。』

確かにトリステインと同じ“王権国家の伝統”はトリステイン対ゲルマニアの戦争の介入の立派な口実になる…

『二つ目は外向的な面であります。』

現在ゲルマニアはトリステインに同盟の締結を迫っているとかならば国を挙げての侵攻はないでしょう…

また国を挙げてならば宣戦布告をしなければなりませんし、軍の規模も今回よりも遥かに大きなものであるはずです…

アルトブレヒト3世も阿呆ではありません。もし仮に国を挙げて侵攻したとなればゲルマニアはその後の国際社会で恥をかくことになりました。それはゲルマニアにとっては百害あって一利はない私とは考えています。』

確かに破廉恥な行いと捉えられることになる……

さらにいつ報復戦争が起きてもおかしくない火種を作ることにもなる……

『三つ目はゲルマニアの国家体制にあります。』

ゲルマニアは貴族が利害関係で結合し生まれた国にございます……それ故に野心ある貴族が皇帝の命を無視して勝手な行動をしたとしても何ら不思議はありません。

それと今、何処の誰かが「成り上がりの野蛮人どもに臆病になった」と言われましたが……

おそれながら私はゲルマニアを野蛮人だの成り上がりだのと言うのは止めた方がよろしいかと存じます……』

「ほう…それは何故かな？」

トリステイン：いやハルケギニアでも珍しくはない風潮を彼は真つ向から否定した。

『ゲルマニアはトリステインの約10倍の領地を所有しております。またその科学力を嘗めてはなりません。』

またその実力主義なる風潮は良き人材を生むには優れたシステムでもありません…

おそれながら……私はこの3年間で国……いや領地とは“人”であると考えております……

さすれば此度の戦…勝ちはいたしましたがゲルマニアの力侮れませぬ。

驕りは敗北を招きます……

未熟な私めの戯れ言により姫殿下、大后のお耳を濁しましたことお許しいただきたく存じます。』

私は背筋が寒くなった……

この意見中に見せた彼の眼光……子供が見せるものではない……まるで鷹の目のように鋭かった……

勝ったことに驕る様子は微塵も見られなかった……

その後私は彼らを退出させた。

そしてあれから数日後……

「あれはたかだが14の子供などができる目ではない……父親が、金狼、なら子は、黒鷹、か………」

執務室で私は休んでいた……明日からゲルマニア政府との交渉が始まる。

「マザリーニ枢機卿！ド・フリーン領主から早馬で書状が届きました！！！」

「何？……見せてみる………あの小僧はゲルマニアから何を搾り取るうとしているのだ………」

私は手紙を見て頭を抱えた。

「マザリーニ枢機卿殿へ……」

此度の交渉役を引き受けただきありがとうございます。

ド・フリーリン領としては以下の身代金と損害賠償をゲルマニア政府に要求いたします…

身代金

ヴァレーノ子爵……最低でも30万エキュー

その他敵将…最低でも10万エキュー

損害賠償

農産物の売却利益及び此度の戦費、領民への補償金、破壊された農村の修復等々込みで最低でも600万エキュー」

あのゲルマニア政府にこんな要求を突きつけるとは……………

ゲルマニア政府から金を搾り取る気満々だろう……………

そして最後には……………

「国境警備がザルだったのは黙ってますから交渉頑張って下さいね……………」

あと金は出来る限り“ゲルマニア政府”から出させて下さい……………また横領等のないように願います……………横領したらわかっていきますよね? 「……………」

と……………こんな感じの意味の文章が書かれていた……………

私は……………今回の交渉役を彼に任せなかったことを少しばかり後悔した……………

帝国の動揺とレマイル紛争後始末（前書き）

PV380000、ユニーク56000突破しました。誠にありがとうございます。

今回はサイドストーリーという感じで、少しゲルマニア帝国側にスポットを当てて書いてみました。

楽しんで頂ければ何よりです。それではどうぞ。

帝国の動揺とレマイル紛争後始末

ここはゲルマニア帝国帝都ヴィンドボナの皇居にある一室、帝国宰相執務室。

数々の調度品も並べられながら、少し簡素なつくりになっているのはこの部屋の主の気質の表れというものだろう。

この部屋には今、3人の男がおり、中央にある丸いテーブルを囲っている。

「ようやく国内はある程度は纏まってきましたな」

背が高く、すらっとした細長の体系の男が言った。白髪が彼の頭を覆っている。

「ええ、ですがまだ国境付近にはまだ反対勢力もいますから油断は出来ませんな」

それに顎髭の濃い金髪の男が答える。その少し表情は厳しい。

「同盟締結のためには国内をさらにしっかりと纏め上げねばなりません。トリスティンへの重要なカードになりますからな。よろしく頼みますぞ。宰相閣下、チャルロフ卿」

そして三人目の、ちょっと丸っこい体系をした坊主頭の中年男性が答える。

会話の内容を無視して、傍目からしてみれば、どこかの学生の同窓会で語り合う三人組みか何かにはしか見えないが、彼らはれっきとしたゲルマニア帝国の要人である。

背の高い、最初の発言をした男の名前はジャン・フォン・ヴェルダース。階級は侯爵で年齢は55。職業はゲルマニア帝国宰相でこの部屋の主だ。

昔は流れるような美しい金髪をしていたのだが、いまやそれは見る

影もなく葱のような白髪へと変わっている。

その理由は宰相の気苦労なのか、それとも他の何かなのか　それを
知るのは当の本人だけである。

二番目の　顎鬚が濃く、今も仏頂面をしているこのゴツイ顔をし
た金髪の男はヒルリック・ヴァスコール・フォン・チャルロフ。ゲ
ルマニア帝国内務卿を務める、伯爵の爵位を持つ47歳の男だ。

この表情　仏頂面は彼の基本的な表情で、かなり固定されてきて
いる。宮廷の貴族からは“鉄面”のチャルロフとあだ名をつけられ、
陰口を叩かれている。

三番目の男はディラン・ソレンセ・フォン・レフォット。

階級は伯爵でゲルマニア帝国外務卿を務める男だ。

外見は中年太りを始めた冴えない男にしか見えないがかなり有能な外交官である。

ゲルマニア帝国は今、隣国のトリステイン王国に軍事同盟と二国の間での婚姻というものをトリステインに対して要求している。

目的は“始祖の血統”を皇族の中に取り入れ、ゲルマニアの国際的地位を向上させることだ。

その相手としてトリステイン王国が選ばれた理由は実に簡単だ。小さい、近い、弱い。これらに限る。

最後の要素に関してはメイジの比率などを考えれば一概にそう言えるかは疑問だが理由の一つには入るだろう。

アルビオンは二国間にかかなりの距離があるし、王家の人間は男が多く、大公家に関して年頃の娘がいなかったために却下となった。

ガリアに関しては王女はいるものの何時内乱が起きるともしれない国内情勢に介入するのは危険性が高い。それにガリアは名実ともにハルケギニア最大の大国。婚姻と同盟を申し込んでも断られる可能性が高い。

ロマリアなど論外だ。間にガリアを挟んでいるし、同盟なんぞ結んでしまったら向こうの介入がそれこそ雨霰のごとくやってくるのは目に見えているので話題にすら上がらなかった。

結婚する相手がいる以前の問題だ。それ以前にゲルマニア帝国内ではブリミル教の信仰心は薄い。同盟しても皇帝の人気や求心力が上がるわけでもないのだ。

それと、ガリアとトリステインの間にはクルデンホルフ大公国とい

う独立国家がある。

空軍最強と言われるアルビオンに次ぐと言われるほどの強力な空軍を持っており、財力も結構あるのだが、あの国家はもともトリスティンの一部だ。

彼の英雄王から下賜された領土であるためトリスティンの主導色が強いボツとなった。

トリスティンは先王の妃、マリアンヌが女王となっているとは聞いているがそれはあくまでも表立っての話で実際は夫の喪に服しているのが現状だ。

今、トリスティンの宮廷内は貴族の権力闘争で溢れかえっている。

そんなことが国の中枢で起きているので国力の衰退など当然のことなのだが、向こうはいまだ大国気分とでもいうのだろうか、かなり上から目線の交渉をしようとしている。

同盟の内容などの交渉に關してもそれがまかり通っている。微温湯にどっぷりと浸かった連中は制御が難しいものだ。

だが、此方にも名の聞こえる“鳥の骨”ことマザリーニ枢機卿が国内を纏めているためになんとか交渉は進んでいる。

地道な交渉であれば向こうに落ち度があればそれを口実にも出来るからだ。少なくともこの三人の脳内に“交渉断念”という文字はなさそうだ。

三人は紅茶を口にす。最高級の茶葉から抽出された茶の味と香りを存分に楽しんでいた。

Bannon!

「宰相閣下！一大事にございます！」

すると、部屋のドアを勢いよく開けて、宰相の秘書官の青年、ジャック・フォン・アルマドクスが入ってきた。

「ジャックよ、どうしたというのだ、騒々しい。」

「トリステインが攻めてでも来たのか？」

入ってきたジャックにチャルロフとレフォットがそう返す。

「これは外務卿、内務卿もおられましたか。見苦しいところをお見せしました」

「気にするな、それより何があったのだ？」

ジャックが二人の存在に気付き、挨拶をしていると彼の上司のヴェ

ルダースが尋ねる。

「それが……」

「どうしたというのだ、早く言わんか」

ジャックは少し話ただけで黙り込み、それを見かねたヴェルダースが報告を促す。

「ただいま国境警備隊より連絡がありまして、ヴァレーノ子爵が傭兵も含めた軍勢2000を率いてトリスティン国内に侵攻しました！！侵攻先はおそらく、ド・フリーン領と思われます！」

ジャックの口から発せられたその言葉に三人の顔には驚愕が走った。それも当然だ。現在同盟締結を迫っている隣国にまだ子爵とはいえ

ども国内諸侯が単独で、しかも軍勢を率いて進出したのだから。

「閣下は…それは閣下のお耳に入っているのか!？」

ヴェルタースは声を荒らげた。閣下とは現ゲルマニア皇帝アルブレヒト三世のことである。

「はっ!今別の者が閣下に報告に向かっております。宰相閣下は如何なさいますか?」

「決まっております。閣下にお目通りを願う。二人も付いてきてくれ」

「了解です」

「どちらにせよ、私は行かねばなりませんかな」

これは外交問題でもあるので外務卿のレフォットが行くのは至極当

然のことである。

その後三人はすぐさま椅子から立ち上がり、アルブレヒト三世のいる執務室へと向かった。

彼らが執務室に向かってから数分後、アルブレヒト三世の座る玉座の前に三人が膝を折った。

「閣下、御呼びでしょうか」

「ああ、ヴァレーノがトリステインに侵攻したのは聞いておるな」

「はい、同盟に関して会合をしていたので外務卿、内務卿共に聞いております」

「お前はヴァレーノとド・フリーン　どちらが勝つと思っ？」

「恐れながら、ド・フリーンかと存じます」

「ほう、レフォットやチャルロフはどうだ？」

「恐れながら、私もド・フリーンかと存じます」

「私も外務卿と宰相閣下と同じにございます」

「何故だ？」

三人が同じ考えを示したことに、アルブレヒト三世は疑問を投げ掛ける。

「ド・フリーン家の隣にはヴァリエール公爵家の領地がございます故、挟撃される可能性は十二分にございます。それに向こうの王軍が出てくる可能性も否定できません」

「うむ……確かに、武力衝突に発展した場合はその結果を見て判断する。だがどちらにせよヴァレーノ子爵家は取り潰しだ。」

下がって構わん、ご苦労だった。チャルロフとヴェルダースは情報を集めるように手配しておけ。レフォットは和平交渉の準備だ」

「……畏まりました」

その後三人は退出していった。そして翌日ヴァレーノ子爵軍敗走の報が帝都に届けられた。

そしてそれから3日後……トリステイン王国からゲルマニア帝国宛に一通の書状が届いた。

「ククク…ディエル・メディナクー・ド・フリーンか、随分と面白いことをする小僧よ」

「閣下、どうなさいました？」

ヴェルダースは書状を見て笑みをこぼしたアルブレヒトを不思議に思い、尋ねてみた。

ヴァレーノ子爵敗戦の報はゲルマニアの中枢にいる人物達は知っている。外務卿のレフォットも同席している。

「読んでみる、トリスティンからの書状だ」

「拝見させて頂きます……これは誰が考えたのでしょうか？」

「じねは……」

二人はアルブレヒト三世から書状を手渡され、その文面を見てこつ声を漏らした。少し驚きが混じっている。

「トリステインの使者の話ではマザリーニ枢機卿が考えたようだが恐らくあの小僧だろうな。これ以上戦争をしたくないとみた。この要求は願ってもないことだが、どうする？宰相、外務卿？」

アルブレヒトは意地悪気に笑いながら二人に尋ねた。

「すぐさま交渉に応じましょう、早めの交渉で解決するならば他国に介入もされませぬ」

レフォットはそう答える。ゲルマニアがガリアやロマリアなどの介入を受けないようにするためには早めの和平成立が一番であるからだ。

「しかし閣下…これに感じるとなれば、かなりの出費となるのは必ずにございませぬが？」

だが、その文面を見てヴェルダースはそう口をはさむ。確かに100万エキユーには満たない金額だとしてもこれは完全に予想外の出費だ。今後にかかしの影響が出ることは間違いないだろう。

「そんなもの、ヴァレーノから出来るだけ絞り取ればよかるう、足りない分は国庫から出すしかあるまい」

国内政治の混乱を招いたなどとヴァレーノ子爵家から今回の件の責任を負わせることなど造作もないことだった。その大義名分など腐るほどある。

国庫の負担を可能な限り少なくするためにその策は当然取るべき策だった。それと同時にその領地を没収することで、皇帝直轄領が拡大できるのでデメリットだけではないのだ。

「畏まりました、財務卿、内務卿と連携し準備に取り掛かります」

「ああ、頼んだぞ。それとレフォットは交渉の準備だ。仲介役はツエルプストー辺境伯にでも任せればよかるぞ」

「「畏まりました」」

その後二人は準備のため退出していった。

それから数日後、トリステイン王国とゲルマニア帝国の間で“レマイルの戦い”に関するド・フリーン領への賠償金とヴァレーノ子爵をはじめとするゲルマニア侵攻軍諸将の身代金に関する交渉が、ツエルプストー辺境伯の邸宅を会場として5日間ほど行われた。

だが、和平交渉はさほど拗れることもなく、一週間以内という異例の速さで両国が同意し、成立した。

当初、アルビオンやロマリアなどを含めた各国では2国間の対立による交渉の難航、長期化が予想されていた。

だが、両国のトップが交渉に乗り気で会ったことと、トリステイン側から出されたゲルマニア帝国への要求というものがとてもシンプルなものであったことがその理由としてあげられる。

交渉に際して、トリステインがどんな無理難題を押し付けてくるのかというのがある意味での焦点ではあったのだが、トリステイン側が通称「マザリーニ案」の提示を事前に行っていたことにより、事前にゲルマニア側が対応を決めていたため纏れなどはほとんど起きなかった。

また、トリステイン国内の司法権を担う機関“高等法院”が報復論に反対し、和平交渉に前向きだったことも大きな理由だ。

当初、トリステインの宮廷内には軍部を中心としたゲルマニア帝国への報復論が展開されていた。

「マザリーニ案」とは王宮内の人物が言う、最初に浮上した和平交渉条件 通称「ド・フリーン案」を枢機卿ら外交の担当者がそれを基に作り上げたものだ。

その後、ゲルマニア帝国帝都ヴィンドボナにて侵攻軍諸將の身柄引き渡しとその身代金、賠償金の交換式が行われた。

それに出席した人物 ゲルマニア帝国側は交渉の仲介役を務めたツエルプストー辺境伯、ゲルマニア帝国宰相ヴェルダース侯爵、外務卿レフォット伯爵。

対するトリステイン王国側はマザリーニ枢機卿、高等法院長リッシユモン卿そしてド・フリーン領主ディエル・メディナクー・ド・フリーンとその部下数名などだ。

こうして“レマイルの戦い”は完全に終幕を迎えたのだった。

そしてこの“レマイルの戦い”がハルケギニアの軍事に与えた影響というものは特筆するようなものではないだろう。

ド・フリーン領軍 特に砲撃部隊の錬度の高さは称賛に値するかもしれない。だが、その結果が各国に衝撃を与えたのは明らかである。

数字を見ればゲルマニア諸侯軍20000に対しそれを迎え撃つド・フリーン領軍950。約二倍の兵力差を打ち破ったというその結果が目を引き実質的な問題に気づくものはあまりいなかった。

後にこの戦をとある者

ギルバート・ヴィッツはこう語る。

「それはまさしく、鷹が空へと飛び立った戦だ」と。

ラゲドリマンの宴会

S I D E

デイエル

あのレマイルでの紛争から5ヶ月の月日が流れた……

一応ゲルマニア政府との交渉も成立した。

手に入った金は請求額よりは低いがある程度納得できる約580万
エキュー

すぐさま農作物等々の損害賠償やら修復復興費用とかに使ったりし
たら結構早く消え失せていった……

現在領地は少しずつではあるが立ち直り始め、活気が満ち溢れてい
る……

遅しいな……

これは俺の率直な感想だ…

確かに行政が支援をしたが領民の自主性が強い土地なのかそれとも被害が軽かったのか…かなり早めに回復の兆しを見せた。

はっきり言うと今の俺にはある悩みがある……

明後日からトリスティンの名所「ラグドリアン湖」を始めとしたトリスティン各地にて行われるマリアンヌ大后の誕生会なるものに出席しなくてはならないのだ……

ハルケギニア中の多くの貴族が招待される…これはまだいい…

一時は国交が断絶寸前にまでになったゲルマニアの皇帝やらのお偉いさんも来る…

これもかなり気まずいけれどもまだいい……

だが……ゲルマニアをも上回る一番の問題は“1週間”とかいうふざけてるとしか言い様のないその期間の長さ……

誕生パーティーなんざ1日やりゃ十分と感じてしまつのは俺だけだろっか？

あと俺……………

交渉終了後に「シュヴァリエ」の爵位貰っちゃったんだよね……………

最初は断ろうとしたんだけどもヴァリエール公爵やヴィッツ団長等その他もろもろの人々から「受けなさい」と推されたので爵位をもらった。

当初王室と王軍のお偉いさん連中が「たった14歳の子供に「シュヴァリエ」の爵位を与えては如何いなものか」反対してたらしいんだよね……………

でもマザリーニの爺とヴァリエール公爵やアンリエッタ姫が「テメエらがそんなことを言える立場か？会議で時間を潰してアイツに任せっきりにしていたのはどこの奴らだ？」みたいなことを言っただけでその後奴らからも反対意見は出なかつたらしい…

頑張ってくれよ宮廷雀達！！（最初から期待していないけれど……………）

爵位なんかいらから……………

とにかく領地の復興資金となる金をくれ！ブリーズギブミーマネー！！

確かに「シュヴァリエ」の爵位は年金（＝お給料）を領の予算とは別に貰えるから俺の貯金になるのは嬉しいんだけど……

名前が長くなる……

ディエル・メディナクー・ド・フリーンでも長く感じるってのに……

314

今度からはディエル・メディナクー・シュヴァリエ・ド・フリーン

……

長すぎる……

紛争の処理やら交渉やらをしている合間にいつの間にか俺は15になっただ。

トリスタニア付近にある“トリステイン魔法学院”に入るのは来年からでいいか……

本当はもうそろそろ魔法学院に通わなければならない年齢なんだろうけども俺はまだ領地経営や復興作業なんやらで忙しいからまだいけない。

それに魔法学院に通う目的は基本的にステータスづくりと将来の結婚相手探しみたいらしい……

おいおい……国立の魔法学院への通学の理由がそんなんでいいのだろうか……？

そんなことしてる暇は今の俺にはねえつての………そんな暇あったら書類整理とか予算編成やってるってんだ…

それに無論この世界には“義務教育”とか“奨学金”の制度みたいな家計に優しい制度なんてのは存在しない……

さらに言えば魔法学院はこっちでいう“貴族専用の公立高等学校”みたいなモンだから学費は自己負担……

そして学費が超高いんだなコレが………

しかも生徒は全員貴族で学院で雇ってる教師と使用人は1000人以

上……

さらにはガリアやゲルマニア、アルピオンみたいな外国から留学生がくるとか……

そこは意外だったな……てっきり完全に閉鎖的なモンだと勘違いしてた……

意外に柔軟っていうか近代的なところはあるみたいだ……

あと最近気づいたのだがカトレアさんがラ・フォンテーヌという子爵の爵位を貰っていた。

ラ・フォンテーヌ領はヴァリエール公爵の領地の一部となっている

……

これに気づいたのは戦後処理等のお礼でヴァリエール公爵のところに挨拶にいった時だ。

あと……カトレアさんとエレオノールさん達上の姉妹には「様」付けではなく「さん」付けで呼んでいいと公爵やカリーヌ様からはそう言われた

………なんでさ？

まあ……もともとルイズは俺より年下だから「様」なんざ付けずに呼び捨てにしていたんだがな……

閑話休題

時は流れ……………俺にとって地獄のパーティー週間が幕を開けた。

初日は晩餐会だ……………

俺はスーツを模した紳士服を着ている

晩餐会に並べられている飯は豪華絢爛贅沢三昧……………

それ以外の表現のしようがない……………

これだけの量の超絶高カロリーで不摂生な食い物があと何日続くの
であろうか……

少なくとも屋敷の食事3日分以上くらは優にあるだろうその脂っ
こそと量……

一瞬それを想像して俺は軽く目眩がしたのです……

あー1日しか離れてねえってのに………うん………

冗談抜きに屋敷の食事が超恋しくなってきた……………

ナバリー料理長でもリックさんでも誰でもいいからプリーズヘルプ
ミー！

そして今俺は……………パーティーの中で完全に孤立しています……………

確かに他の貴族連中が豪華絢爛キンキラの装飾のついた衣装を身に纏っているのに対して俺はオールブラックの地味々々な紳士服とワイシャツにネクタイ……………

確かに服装的には超浮いてんのはわかるけれども……………

遠くから動物園の檻の中にいる鑑賞動物のライオンを見るような視線で俺を見るのは止めて下さい……………

マジで……………超居心地悪イのです……………

その好奇やなんやらの入り混じった貴族連中の視線を浴びながら俺はパーティーの食事を少しずつ摘まんている……………

主に野菜中心だけでも……………

ハルケギニアの“ハシバミ草”とかいう葉っぱ……………苦味が中々癖になる……………

簡単に言えばゴーヤの葉っぱバージョンみたいな感じである……

大抵の人はコレを嫌うんだとか……

それにしても気まずい……

帰りたいたいけれども帰れないというなんとも辛いシチュエーションで
ある……

俺は手にある水のグラスを片手にパーティーホールのバルコニーへ
と逃れた……

俺は前世での生活経験故かまだ20歳未満の年齢での飲酒には抵抗がある……

此方に生まれてもう15年も経ったってのにな……

だがこの世界では俺くらいの年頃貴族の子供達でもワインを飲んでいるとか……

世界が変わればルールも変わるもんだな……

“ 郷に入れば郷に従え” …… 言われても中々難しいものだ ……

さすがに晩餐会なのでルシファアは帯刀せずに部屋に置きっぱなし
である ……

「君があゝの“黒鷹” ディエル・メディナクー・シュヴァリエ・ド・
フリーンか ……」

突如俺は後ろの男から声を掛けられた ……

『 貴方は …… ジョゼフ陛下 …… 』

170〜180センチはあるであろう体とその家系のみ許された
“青色”の髪の毛……

そう……

俺に声を掛けてきたのは“無能王”こと現ガリア王国国王ジョゼフ
1世その人であった……

『ジョゼフ陛下……これは失礼いたしました……』

「構わぬよ……それにしても君はせつかくの晩餐会だというのに何故黄昏ていたのだ？」

俺が恭しく頭を下げて詫びるとジョゼフはそれを許して俺に質問してきた……

『いえ……今……我が領の墓に眠る先の戦で亡くなった戦友達を思い黄昏てしまいました……』

あの戦争は悲惨だった……

いくらこちらが勝ったとはいえ……両軍に死者859人……負傷者10

00人以上……

その死傷者の内……此方は死者155人に負傷者494人……

ヴァレーノ子爵軍は死者704人と負傷者500人以上……

被害総数は少ないとはいえ此方は優秀な歩兵や騎士達を数多く失った……

「そうか……だが君は生き残ったのだ……頑張りたまえ……」

『有難き御言葉にござります……陛下……』

俺が顔を上げた時のほんの一瞬だけ…俺とジョゼフの目が合った…
……

違う…!

コイツは……

コイツは決して“無能”などではない……………!!

まさか……………無能ぶりは演技なのか？

一体……………コイツは何を考えているのだ？

……
ジョゼフはそう言って俺の肩を叩き晩餐会の会場へと去って行った

俺は奴の瞳の奥とその背中に何か“嫌な予感”を感じずにはいられ
なかつた……

ただ……これだけは言える……

あれは断じて無能な奴の目などではない……！！

俺は直感でそう判断していた……

その後晩餐会は終了した……

ジョゼフとバルコニーで話していたからか……俺には更なる嫉妬やらなんやらの混じった視線の包囲網が敷かれていた……

そして誕生会“3日目”……

トリステイン屈指の名所“ラグドリアン湖”で再びパーティーが開かれた……

もういい加減うんざりである……

パーティー開始直後に俺はある男から声をかけられた……

ゲルマニア帝国皇帝アルブレヒト3世である。

「貴様があの“黒鷹”か……会いたかったぞ」

『アルブレヒト3世陛下……』

「余にあまり従わぬヴァレーノ子爵家を叩き潰し、金と外交で此度の決着をつけたこと………礼を言つぞ」

『いえいえ、交渉の際にはこちらの無理難題に応じて頂きありがとうございます。』

ぶっちゃけた話……賠償金で580万エキュも貰えたのは奇跡だ
……拒否されるとばかり思っていたのだが、ゲルマニア側はあっ
さりと応じたのだ……

「構わぬ、あれはゲルマニアの国庫からではなく大半がヴァレーノ
から搾り取った金だからな」

チツ……流石に阿呆ではないな……金の大半をヴァレーノに負担させ
るとは……
すぐに応じたのはこういう理由があったのか……

ゲルマニアの財政に影響を出させないようにヴァレーノに“此度の
騒動の発端の責任”という大義名分を使って賠償金を捻出させると
は……

コイツ…………中々手強い…

「なんというか…………噂とはあてにならないものだな…………」

俺が目の前の彼…………アルブレヒト三世に心の中で密かに警戒心を抱いていると、突如彼は呆れたようにそう言った…………

しかもため息混じりとは…………

どづいづいとだ？

『？おっしゃる意味がいまいちわかりませぬが……………』

「貴様……“黒鷹”は血のごとき真紅の軀を持つ疾風のごとき駿馬に跨がり身の丈ほどの大剣と真紅の長槍を振り回して戦場を駆ける悪鬼羅刹のような男だ……と余はトリスティンの使者から聞いていたが……」

話の内容と実物がここまで違っているとは流石の余も思わなかったぞ……」

悪鬼羅刹とか……王宮の連中はどんだけ俺を不良っていうか鬼軍曹にしたいんだよ……」

というより……そんな話、俺は一言も聞いてないんだけど……」

『はあ……………それは陛下の買い被り過ぎにございます……………それがし某などはただ“領地を守る”という覚悟の元に集まった戦友達と共に戦場を駆け、自分の任を果たしただけのしがない小僧に過ぎませぬ……………』

「ククツ、つまり貴様は“自分はやるべきことをしただけだ”と言いたいのだな？」

俺の答えにアルトブレヒトが笑いそう返してきた。

『左様でございます……………』

「ククククツ、貴様は実に面白い小僧だ…気に入った……………また会

おじぞう………」

『わかりました。ありがとうございます…陛下』

アルブレヒトはそのままワイングラスを片手にパーティーの喧騒の中へと戻っていった……

アルブレヒト3世との会話でさらに目をつけられた俺はその後なんとか周囲の目を盗んでパーティーという名の地獄からの逃亡に成功し、今は“ラグドリアン湖”の湖畔の草むらに寝転がっている……

今夜は……

いや今夜“も”満月だ……

ハルケギニアは地球とは違い“月が2つ”存在するのだ……

最初は腰を抜かしかけたが今はこの常識はずれな光景には完全に慣れてしまっている……

今俺はこうして生きている……

だが俺が生きているこの今という時間の下には何百もの戦友と敵兵達の屍が積み重ねられている……

本当に……あの戦いは“失ったものは大きく……得たものは何も
ない”戦いだ……

戦いの褒賞として渡された“シュヴァリエ”という騎士の爵位……

それは今回……“俺達”が失ったものの何の変わりにもなりやしない
……

共に訓練をした戦友達……

彼らはどうやって戻ってはこない……

“もう”……いや“まだ”5ヶ月しか経っていない……

「漸く我の元に来たのか……異なる理「ことわり」を持つ者よ……」

『…ッ！誰だ？』

突如聞こえた男とも女ともとれる声に俺はすぐさま聞き返した……

辺りには誰もいない筈だ…

では一体誰が？

「我は此処だ……異なる理を持つ者よ……待ちわびたぞ……貴様と会うまでに幾度月が交差したことが……単なる者の世に溶け込みながら生きる貴様に一度会って見たかったのだ……」

何故だ？……

………何故コイツは俺が“転生”した人間であることを知っている？

そしてコイツは何処から俺に話し掛けているのだ？

辺りには人影はなく…あるのは“ラグドリアン湖”とその湖畔の草
原のみ……

「我は貴様の目の前にはいるではないか……」

“目の前”……まやか？

「……………貴方がラグドリアン湖の水の精霊か……………？何故俺の“魂の秘密”を知っている？」

「簡単なことだ……………我は貴様の体内の“水の流れ”を探り貴様の体の中の単なる者との違いを見つけた……………ただそれだけだ……………」

突如湖の水が沸き上がり人の形を象って俺の目の前に現れた……………

いつの間に俺の“魂の違い”を感じたのだ？まったく……………抜け目な
いっただらありゃしない……………

『流石は水の精霊だな……というより……貴方は何故俺に話し掛け
てきた……？』

それに貴方“ラグドリアン湖の水の精霊”の管理はトリスティンの
旧家、ド・モンモランシ伯爵家が代々引き継いできた筈だ……

そして俺は“水”ではなく“土”のラインだぞ？“水”の魔法は《
ヒーリング》しか使えん……』

「なに………我は貴様の魂に眠る“理”に興味を感じた………ただそ
れだけだ………」

『………で？水の精霊の貴方から見て俺はどんな奴なんだ？』

言い忘れていたが……俺はあの戦いの後に“ライン”になり“土”
以外の系統が使えるようになった……主には“風”だ……

「……………さっぱりわからない……………は？……………だからこそ貴様は実に面白い……………」

おいおい……………探偵ガ レオじゃないんだからそんな台詞を言わないでくれ……………冗談抜きで凄く不安になるからさ……………

と…
というより水の精霊がわからないとかどんだけ俺の魂おかしいんだよ！？

そして……………マジでさっきとキャラ違ってないか？精霊よ……………

「さて異なる理を持つ者よ…単なる者が来たようだ……………我は再び湖に戻るが……………貴様も単なる者の中に戻るといいぞ……………」

『そうだな……………精霊である貴方と俺が会話していると知れたらまた騒がしくなるからな……………じゃあな……………』

「また会える時を待っているぞ……………異なる理を持つ者……………いや……………
…ディエル・メディナクー・ド・フリーンよ……………」

『俺の名前…覚えてくれたのか…嬉しいねえ…………俺が死ぬまでに
また会えればの話だけだな……………また会おう……………“約束”だ……………』

俺はこうして精霊と別れパーティーに戻ると…………翌日俺は風邪を引
いたという“仮病”でパーティー会場を去った…………

俺が去った後のラグドリアン湖では…………

アルビオン王国皇太子ウエルズ・テューダーとトリステイン王国
王女アンリエッタが密会をしているということを俺は知らなかった

……………

「異なる理を持つ者よ……果たして貴様はこの先“どのような奴”に巡り合えるのか……楽しみだ……」

そして水の精霊がそう言ったのは誰も知らない……

財政計画と巡り合わせ……（前編）（前書き）

ユニーク11000、PV900000超えどうもありがとうございます。これからもこれを励みに頑張ります。

財政計画と巡り合わせ……（前編）

俺が途中で誕生会をサボってから数週間が経った……

『むむむむ………一体どうしたものかのう………』

俺は今………

執務室の自分の机の上にある報告書の束と睨みめっこをしている真
っ最中なのである………

若干どこぞの美少女にしか見えない高校2年生の少年のような翁言葉

なのは気にしないでくれ……

俺が領主になってからではあるが一応半年毎に“財務状況の報告書”なるものを提出させている……

所謂“上、下半期決算”である……

今日の前にあるのは上半期の決算に関するものである……

「えー…つまりのところ…我が領内の財政は赤字になりかけという状況にあります……」

理由は主要な収入源の農作物への被害があつたことにより収入が減つたからです………」

『……………わかつた……………』

来月から私の給料は70%削減させよう……」

軍の合同演習の回数などもヴィッツ団長やカイリ隊長に私の方から打診してみよう……」

アイシル財務長官、報告書の提出御苦勞様………』

「ありがとうございます……しかしディエル様……よろしいのですか？」

『構わないですよ……背に腹は変えられませんからな……』

それに私は一番の高給取りだから当然でしょう？それに“シュヴァリエ”の給金がありますからそれで差額を補填すれば問題はありますまい……

長官……退出しても構いませんか……？』

仮面の反逆者と皇帝になった某シスコン頭脳明晰少年のセリフではあるが……

“王様が動かないと部下がついてこない”

これはかなり普遍的というか実用性の高い言葉だと俺は考えている

……

上が模範や具体的な目標等の道しるべを示すことで部下の歩みをサポートする……

これは過度であってはいけなが適度であるならばなんら問題はない……

「わ……わかりました……失礼しました……」

パタン……

アイシル長官は速やかに退出して行った……うん、流れるように綺麗な退出だったな……

マズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイ……

358

マジでマズイ……

ウチの領が現在進行形で抱えている財務上の問題は“赤字になりかけの財務状況”などという一時的な問題ではなく……

“完全なる農作物への収入源の依存”なのである…

たしかに肥沃なこの土地柄故にあってもおかしくはない問題である
……

農作物への依存のせいか畜産業があまり発達せずに“むしろ”足を
引っ張りかねない状況らしい……

“農作物への収入源の依存”はとにかくマズイ……現時点での財務
上の“超”最優先課題である…

今回のような事態が二度と起きないなどという楽観的な予測はして
いられないのだ……

だからといって下手な産業シフトを行えばリーマンショック以降の
アイルランドのような事態を引き起こしかねない……

だとすれば……どうやればこの状況から脱却できる？

それに“畜産業の発達と新たな収入源化”という新しい課題もある
……

さらに言えばハルケギニア全体で起きている“紙の価格高騰”……

これは領内の公用文書に使ったりするから無視ができないのだ……

他に羊皮紙パピルスというものがこのハルケギニアに存在するのだが……

その生産にはかなりのコストと時間がかかるのだ……その代わりにこれは保存性が高い。

まさしく一長一短の品である。

紙は植物の繊維から作った至ってシンプルなものだが生産量がハルケギニアでは少ないがために貴重品となっている………

それゆえに“値段の高騰”という今日の事態は必至なのであり、領内で紙にかかる経費はバカにならない………

このまま行くといずれ出費の何割が“紙への出費”なんて笑えない話が起こってもおかしくはない

現代のようにパルプ紙がハルケギニアに存在しない以上は別の方法で紙を作り、少しでもこれにかかる経費を抑えなくてはならないのだ……

それに有効利用すれば新たな“ビジネス”へと変貌するかもしれないのである

これは“いずれゆつくりのんびりと”などではなく“早急かつ確実”な対策が求められる優先順位の高い課題の一つである……

まだ活版印刷はこのハルケギニアには早いかもしれない……

また地下倉庫の書物達のところに知恵を借りに行くしかないかな…

……

こんな時に“アイツら”が居ればな……

いつの間にか俺は……自分でも知らないうちにため息をついていた

……

あれから数日後の昼……

俺は屋敷で昼食を取っていた……

ヴィッツ団長やカイリ隊長達と領軍関係者との話し合いの末になんとか“領軍の合同演習の回数削減”にこじつけた……

そして今日の昼食は……

試作品の醤油を使った和風オートミールと豚肉と野菜の炒めものに牛肉のスープだった……

ん？ “いつもの肉”と味が違う？

ナバリー料理長の料理の基本的な考えは“盛り付けで誤魔化さず素材の味と料理人の腕で勝負する”である…

つまりは食材を変えればすぐに味に出るのである（尤もそこをまるで感じさせないのがナバリー料理長の腕の凄さなんだが…）

昼食後…俺はすぐさま厨房に行った…

『ナバリー料理長…今日の牛肉と豚肉…仕入れ先変えませんか？』

たか？』

「おお……ディエル様よく気づいたな！……今日の朝にヴィスミルのルーディって若い“貴族”の富農から買った豚肉と牛肉なんだけどな……ディエル様と同じ年で貴族だ平民だとかって威張んなくて優しい奴だったよ……」

これがまた驚いたことに今まで見たどんな豚や牛とも味が違うんだよ！！しかも豚と牛の肌が洗ったつのに“真っ黒”なんだってよ！！

いやあ……ウン十年ずっと料理人やっててあれは初めて食べた肉だね……

やっぱり人生長生きしてみるもんだよ……うんうん……あのマルトーの野郎にも食わしてやりたいぜ全くよ……」

ヴィスミルとはヴィングラード近くにある農業地帯である……

そこはド・フリーン領でもかなりというか最大クラスの穀倉地帯な
んだけど……

あそこに畜産業をやってる農家があったのか……？

しかも経営者が貴族とはな……

柔軟というか……珍しい頭腦の持ち主が居たもんだな……

俺は人のこと言えないけれど……

今度屋敷に招いて話でも聞いてみよっかな？

なんだが参考になるいい意見が聞けそうな気がする……

このハルケギニアの貴族も捨てたもんじゃないね……

ってそれより……

『は？洗ったのに体が“真っ黒”ですって？豚と牛の体が？』

おいおいおいおい……ちょっと待てよ？

前世で聞いたような単語があったような気がするんですけど……

洗ったのに体が黒い牛……洗ったのに体が黒い豚

つまりは……

体が常に黒い牛……体が常に黒い豚……

面倒だから“体が常に”は除外して……………

黒い牛……………黒い豚……………

これも面倒だから略して……………

黒牛……………黒豚……………

牛の場合は“肌”じゃなくて“毛”だから……………

黒毛牛……………黒豚……………

!!!!!!……………まさか!

洗ったのに体が黒い牛と豚⇨黒毛和牛と黒豚!?

何故だ??何故前世の日本の“ブランド肉”の代表格的な存分がこのハルケギニアに!?

待てよ？……………“ブランド肉”……………“ブランド”？

……………これだア！！

ハルケギニアにはまだ食品の“ブランド戦略”がない！！！！

今の内に領内の畜産業の豚肉や牛肉の肉質を向上させて我が領の“特産品”並びに“ブランド化”してしまえば！！

このハルケギニアには美食家の貴族や金持ち…さらには料理人がわんさかいる…！

つまりは美食という名のニーズは山のようにあり、ユーザーも沢山いる…！

それに……たとえ“地域ブランド”や“特産品”にならなくとも“畜産業の質の向上”という結果が得られるではないか…！

そしてその利益は領の“新たな収入源”となる…！

『ナバリー料理長！ありがとうございます！それとご馳走様でした
！！』

「お……おっ……ありがとうよー！」

俺はナバリー料理長に体を90°以上を曲げる超最敬礼でお礼を言
うと執務室へと猛ダッシュで駆け出した…

そして数分後…バンツとドアを勢いよく開いて執務室に入る…

執務室は軽く俺の寢室と化しているのでコートやなんかの類いは存在するのだ……

「ど…どどど…どつしたのですかディエル様？そのようにお急ぎになられて……」

『リックさん……私の今日の午後の予定は!?!』

リックさんが狼狽しているが俺はそんなことに目もくれずにすぐさま

ま質問をする……

「は……はい……えーとですね……今日の午後は珍しいことに用事という用事は何もありませんが……どうなさいました？」

『ちよつと“ヴィスミル”のルーディという人物に会ってくる……財政健全化に一つの案が出来たからね……後を頼みます！！』

「わかりました……お気をつけて行ってらっしゃいませ……」

『わかりました…いつてきます!』

俺はすぐさまコートを羽織って部屋を飛び出して馬小屋にいるセキトに跨がり“ヴィスマイル”に全速力で向かった…

ディエルー!俺を置いてくなアーー!!

ん?今誰かに名前を呼ばれたような?

まあいいや……気のせいだろう

そんなことよりも早く急がねばー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0982k/>

鉄風の騎士

2010年10月10日18時55分発行